
Fate/Day to break

勇者マスオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / D a y t o b r e a k

【Nコード】

N 7 6 2 2 N

【作者名】

勇者マスオ

【あらすじ】

かつて異世界で魔王を倒した公務員志望の勇者様が英雄同士がしのぎを削る聖杯戦争に強制的に巻き込まれていくお話。

果たして死亡フラグが乱立するこの戦争を勇者様は生き残ることができるのだろうか？

世界を救ったその後に（前書き）

あの頃の俺はバカでした

世界を救ったその後

俺は世界を救ったことがあると言ったら一体何人が信じてくれるのだろうか？ 多分きつと俺の思うに大半の人間が生暖かい目でそんな戯れ言を吐いた人間からスススッと音もなく引いていくに違いない。無論、俺だってそうする。

……だが残念なことに事実だからどうしようもない。

あれは中学二年生のときだった。当時の俺はコンビニヘガリガリ君を買いに真っ昼間のクソ暑い中を小銭を握りしめてダラダラと歩いていたら突然、まばゆいばかりの光に覆われて気が付いたらわけのわからん森へ放り出されていた。

言い訳がましいように聞こえるかもしれないが断言しておこう。当時の俺は頭にドがつくほどアホだった。だから目の前に現れたどこかの民族衣装のナイスバディな女の子に『この世界を救ってください』という言葉に即答で首を縦に振ってしまったのだ。

つまり簡潔に今まで話したこと要約すると異世界から人間を呼び出して世界を苦しめている魔王を倒してもらう、という他力本願ここに極まれみみたいなことをこのアホは特に考えもせずにOKしてしまったのだ。

たぶんこの時が俺の歴史の中でもっとも後悔したことの一つである。後二つは、母のおやつであったプリンを黙って食ってシバきたおされた時と、親父の自慢の釣り竿をへし折って親父が大人げなく大泣きしてしまった時だ。

……とりあえず話を戻そう。素晴らしく安っぽい設定感が否めないこの冒険は、少女と彼女に渡された聖剣を携えた俺の二人で始まったのだ。

途中で何があったのかは割愛しよう。まあ、語ったら長くなるし、何より面倒臭い。大筋をバツサリと言ったら、DSの女僧侶にDMの男の魔術師、脳筋の腕っぷしは凄い男の剣士が仲間になったことか。今思うとアブノーマルな人間しか集まっていけない。よくぞこんなので世界を救えたな、とつくづく思う。

紆余曲折あったがこの変態集団の五人は魔王がいる城へと乗り込んでいき、そして力を合わせみごと魔王を打ち取り世界に平和をもたらした。

そして魔王を倒した勇者である俺はありがちな感動的別れをして、

——— 本来にあの時は後から思い出して悶絶するぐらいキザな言葉を吐いた気がある、たぶん気のせいだ。そういうことにしよう

——— もとの世界へと無事帰還する。実際魔王を倒すまで三年は

掛かったはずが、こちらではほんの数分間の出来事だったらしい。
白昼夢？なんて考えがよぎったが右手には聖剣が確か握られていて、
それが現実であった事を教えてくれていた。

なんだかんだで故郷に帰ってきて安心したのだろう、色々と混乱した頭で取りあえず一番最初に浮かんだのは留年しなくてよかったと、俺こと笠原輝一はそんな比較的どうでもいいことを考えていた。

俺の日常（前書き）

毎日歯を磨いて寝る。

俺の日常

あの悪魔の暗黒史から三年すぎ俺も高校二年生になった。

そしてその三年間は大変喜ばしいことに何事も問題なく過ごせていた。ビバ自堕落生活。

今は近くの穂群原学園というところに通っている。季節は冬、朝のひんやりした空気が大変気持ちいい。

校門の前にたどり着き、うーんと背伸びをし全身の筋肉を解す。いやー本当に平穩って素晴らしい。

「よう輝一。おはよう」

そんな声に振り向くと茶色の男子制服をきた髪の色が赤銅色の少年がそこにはいた。

この少年の名前は衛宮士郎。一見どこにでもいそうな一般人だが侮るなかれコイツの家は武家屋敷のように広くしかも（↑ここ重要）毎朝超絶美人な後輩に毎朝起こしてもらい、朝ご飯の世話をしてもらっていて、それなんてエロゲ？ を地で突っ走っている大馬鹿野郎なのだ。

俺に魔術の才能があったならば呪殺してる。

しかし残念ながらかつて仲間内から魔術の才能？　なにそれそんなお前なんかにあると思ってるの？　とか言われて涙と共に海へ投げ捨てたので実行には移せないのである。クソったれめ。

「…………リア充なんて死ねばいい」

「いきなりなに言ってるんだよお前」

士郎が呆れたような目でこちらを見る。しまった俺の荒ぶるパトス（情熱）がこぼれ落ちたようだ。

「まあ、気にすんな。それにしても士郎、お前今日早いな？　なんか予定でもあるのか？」

「ああ、今日は一成に頼まれて生徒会のストーブを直しにいくんだ」

なんという献身的な奴だろうか。俺だったら確実に業者を呼べと言っている。だいたいコイツは大抵何か頼まればハイハイと二つ返事で受けてしまうので大して驚きはしないが。

ちなみに依頼主である我らが生徒会長柳洞一成はこの町にある柳洞寺の息子でありつまる所、坊さんの卵だ。誠実でいい奴なんだが俺と顔を合わす度に『死相がでている』と大真面目に除霊を勧めてきやがる。そんなに俺を殺したいのか。

「まあ、大変だな。お前は」

「そんなことないさ。俺がやりたくてやってるんだから」

……本当にコイツアンパンマンか何かだろうか。将来の夢は正義の味方です、と真顔で答えそうだ。

げた箱で上履きに履き替え校舎の中に入る。中にはほとんど生徒はいない。まあ当然いえば当然かこんな時間帯に来る生徒なんて部活に青春を注いでいる連中で殆どは各部活動する場所で汗水たらして頑張っているのだろう。俺？もちろん部活には入ってません。家でエロゲかギャルゲしてます。しんどいし。

「じゃあまた後でだな」

「ああ。ストーブの修理頑張れよ。あと、一成にもよろしく言っていてくれ」

ヒラヒラと手を振り、士郎が生徒会室へむかうのを見送ったあとゆったりとした歩調で教室へと向かう。

コツコツと誰もいない廊下に自分の足音だけが響きわたる。自分の他に誰もいない学校の廊下は何故だか知らんがテンションが上がるのは俺だけではないはずだ。え？ 違う？ そんなことになるのはお前だけ？ そうですか。

まあ意気揚々と内から表れそうになる熱き思いを抑えながら歩いていると突然、背中に氷を突っ込まれたように背筋がピンと張り、体が寒くもないのにぶるぶる震えてくる。

「この体中を巡る悪寒、ピリピリと肌に突き刺さる邪悪な気配……
……遠坂凜かッッ！！」

「なにあんたは人のことを悪魔みたいにしてんのよっっ！」

朝っぱらから元気のいいことで。

「誰のせいだ！誰の！」

ふらりと背後へと顔を向ければそこには不機嫌な顔をぶら下げた美少女がいた。

コイツは二年A組の遠坂凜。坂の上にある一際大きな洋館に住んでいるというお嬢さまで、これでもかっていうくらいの優等生。美人で成績優秀、運動神経も抜群で欠点知らず。性格は理知的で礼儀正しく、美人だという事を鼻にかけない、まさに男の理想みたいなヤツで俺とくらべたらガンタンクとダブルオーライザーぐらいの性能差があるのだ。トランザム。

そんなヤツだから、言うまでもなく男子生徒にとってはアイドル扱

い。

ただ凜の場合、あまりに出来過ぎていて高嶺の花になっている。

凜と話しが出来るのは生徒会長一成君と先生たちぐらいなもの、というのが男どもの通説だ。

……しかし通説は通説でしかない。世の中には知らない方がいい事もあるのだ。

その最もオーソドックスな例がこの目の前の美少女だ。

簡潔に申し上げるとコイツは猫をかぶってやがる。というかも猫に擬態してるといった方がいいかもしれない。つまりコイツの本性はとんでもないのだ。かなりの負けず嫌いで恐ろしいまでの自信家でおまけにかなり金にがめつい。そんなことをこの世の男子が知ったら自殺願望者が増える。確実に。

まあ、そこまではいい。実際俺には関係のないことだし別段困ることでもないし実害もない。

俺にとって致命的なことは遠坂凜がしでかす『うっかり』の方だった。もうはつきり言って呪いの域に達しているそれは小さい頃から腐れ縁である俺を何度となく三途の川の入り口に招いたのだった。

具体的にいうと、ひったくり犯を追っていた凜が犯人を取り押さえるようにして繰り出した、中国拳法十六連コンボがたまたまそこを通過していた俺に『うっかり』間違って放ってしまい、俺を瀕死の重傷に追いやったり、『うっかり』俺の宝であるエロゲのディスクを踏み碎いたりとロクなことしか起こっていない。

つまるところ俺にとって遠坂凜は第一種取り扱い注意物なのである。触るなキケン。

「……で。何のようだよ。凜」

「なによ？ 何かやがなくなっちゃ挨拶もしちゃいけないわけ？」

ふんつと鼻を鳴らし腕を組んでじろりとこちらを睨んでくる。そういう姿も絵になってるのが何故だか腹立たしい。

「ああ。そうだ。お前が決まってそういう態度をとると決まって何か悪いことが起こるんだ」

「…………アンタ一体幼なじみのこと何て思ってるわけ？」

「歩く危険物」

ブチと目の前の幼なじみ（笑）から何かが切れた音がした。

ふっと凜を見てみると恐ろしくフラットな笑顔を顔に貼り付けていた。

あ、これは死んだな。　そう直感した俺はそっと微笑んで一言。

「今日のパンツ何いぐおはああああッッ！！」

言い切る前に鳩尾に鋭い痛みを感じ目の前が真っ暗になった。

……アイツまた拳法の腕上げてやがる。

何とか意識を取り戻し教室にたどり着く。気がついたら最初の予鈴がなる五分前だった。その間教室の前で気絶した俺を放置プレイしてくるクラスメイトとの友情をもう一度見直したほうがいいかもしれない。

ガラガラと教室の扉をあけると何だか悔しいような顔をしたワカメヘヤーの男子生徒が士郎の事をきっと睨みつけている。もしも視線

に攻撃判定が出ていたら士郎の体は穴だらけになっているだろう。

あのワカメヘヤーの名前は間桐慎二。一言で言う超絶ナルシストでとにかく事あるごと自分が特別であることをアピールしてくる。しかも悪いことに顔は悪くないため、女子には大人気と正に男に喧嘩を売っている。余りにも腹立たしいため俺は一回アイツにジャーマンスープレックスをかけてやった。それを実行に移した後、クラス男子諸君には拍手喝采をうけ、クラスの女子には学園祭まで白い目で見られるという仕打ちを受けたが、これにめげずに隙あらばまた狙っていこうと俺は思っている。

それに加えてアイツの妹（美人、おしとやか、ボインの三拍子が揃っている）が士郎のお世話しているので士郎の事を目の敵にしているがいつもさらりと流されてるので必ず返り討ちにあっている。

本日も士郎にさらりと流され敗残兵のごとく撤退するのを横目で見ながら目の前のリア充野郎に声をかける。

「……………リア充もげろ」

「だから何だよ。お前は」

すまん。どうしても抑えられないようだ。

「ふざけたヤツだ。自分から衛宮を追い出しておいて、よくあんな口が聞ける」

と、さっきから士郎のすぐそばにいた我らが生徒会長様が無然とした顔で会話に入ってくる。今さっきのやり取りが気に食わないようだ。

「よう。一成。お勤めご苦労さん」

「おお、笠原。今日も相も変わらず死相がでているぞ。ウチで除霊を試してみたらどうだ」

「てめえ、前からずっと思ってたがてめえとは一度腰据えて話し合ふべきだと俺は思うのだが」

「安心しろ、笠原。何も怖いことなんてないぞ」

「だから話し聞けやっ!!」

「なんだ一成、いたのか」

士郎が今さっき気づいたように言う。

「なんだとはなんだ！ 氣を利かして聞き耳立てていた友人に向かって、なんと冷淡な男だオマエは！」

とりあえず胸張って言うことではない。大丈夫かこの生徒会。

「？ なんで氣を利かすのさ。俺、一成に心配されるような事してないぞ」

「たわけ、心配もするわ。衛宮はカッとなりやすいからな。慎二に殴りかかれれば皆は喝采を送るが、女どもからは非難の嵐だ。友人をそんな微妙な立場に置くのはよろしくない」

「おい、一成。なんで俺の顔見ながら言う」

お前だって喜んでたじゃん。

「オマエはやりすぎなのだ。何事にも限度というもある」
あ、そうですか。

次からはバレないようにコソツと殺ります。

「……………はあ」

何故そこでため息をつく。

「そっか。うん、言われてみればそうだ。ありがとう一成。そんなコトにならないだろうけど、今の心配はありがたい。」

「それよりも、なんでお前はあのワカメには優しいんだよ」

なんか通じあうものでもあるのか？ リア充同士。

「ああ、アレは慎二の味だからな。つきあいが長いと慣れてくる」

慣れる物なのか、アレ。

「ふむ、そんな物か」

ほら見ろ、一成だって首捻ってんぞ、士郎。

「そんな物です。ほら、納得したら席に戻れよ。そろそろ藤村先生がスっ飛んでくるぞ」

「ははは。あの方は飛んでくるというより浮いてくるという感じだな」

アレはそんな所ではすまないと思ってるのは俺だけか？

ホームルームの鐘が鳴る。

通常、クラス担任は五分前に来るものだが、このクラスの担任はそういう人ではない。

二年C組にとってホームルームの開始は今のベルから一分ほど経過したあと、つまり、

「遅刻、遅刻、遅刻、遅刻……！」

なんて叫びながら、ダダダダダー、と走ってくる暴走列車を迎え入れる所から始まるのだ。

「よし間に合ったーあ！ みんな、おは——」

ごきん、と。

あ、死んだな、と思わせるような音を立てて、藤村先生はスッ転んだ。

「」

さっきまでの慌ただしさから一転、教室はなんともいえない静寂に包まれた。

さすが、人間ジェットコースター。

教室内のだれ一人としてついていけない。

……本当に死んじゃいねえだろうな。あれはシャレにはならんぞ。

藤村先生は教壇に頭をぶつけたまま倒れてる。

俯せになって顔が見えないところがまた、否応なしに嫌な想像をかき立てる。

「…………おい、前の席のヤツ、先生起こしてやれよ」

「…………えー、やだよー…………近づいた途端、パクって食べられたら怖いもん……………」

「…………ミミックじゃあるまいし、さすがに藤村でもそこまでやらね

えだろ」

「アンタね、そういうなら自分で起こしてあげなさいよ」

見事なまでの押しつけ合いだ。

仕方ない。ここは、一肌脱いでやろう。

「しゃーねえ。不肖この俺、笠原輝一が起こして――」

「「お前はやめろっ!!」」「」

なぜだ。

「オマエがやったらさらにこの場が混乱するわっ!」

「お願いだから座っててっ!」

……………泣いてもいいですか？

「……………しかたねえなあ。こうなったらアレしかないか」

誰かがぼそっと呟いた。

「うん、アレだね」

周りもその意見に賛成のようだ。

みんなの心が一つになっていく。

「せーのっ、起きろー、タイガー」

全員が声を合わせたわりには、呟くような大きさだった。

特に『タイガー』の発音は聞こえないぐらい小さい。

なのに。

……ぴくっ。

と、沈黙を保っていた藤村先生の体が反応する。

「うお、動いた!? 効き目ありそうだぞみんな!」

「よし続けろ! ガコロウトンの計じゃ!」

おい今言ったヤツ。絶対意味わかってねーだろ。俺も知らねーけど。

期末試験が迫ってきているのでみんなテンパってるのだろう。

調子に乗って、ブンブンと腕を振り回して藤村先生のあだ名を連呼する。

「起きろータイガー。朝だぞー」

「先生、起きないとタイガーです!」

起きないとタイガーてなんじゃそりゃ。内容が凄く気になる。

「負けるなタイガー! 立ち上がれタイガー!」

あしたのジョーみたいに言うな。ジョーに失礼だろうが。

「よし、起きろ先生！　それでこそタイガーだぜ」

「ターイーガー！　ターイーガー！」

「があー！
タイガーって言うなー！っ！」

復活。

あれほどのダメージを受けでもほとんど無傷だ。

「…………あれ？　みんな何してるの？　だめよ、ホームルーム中に席を立っちゃ。ほらほら、始めるから座りなさい」

無性にあの頭をど突きたくなるのは俺だけだろうか？

…………どうやら教室に飛び込んできたときから立ち上がるまでの記憶が、ポツカリ抜け落ちているようだ。

「…………おい、タイガー覚えてないみたいだぞ」

「……………ラッキー、朝からついてるな、俺たち」

お前らまず先生の頭が無事かどうか心配しろよ。

ガヤガヤと自分の席に戻る生徒達。

「むっ。いま誰か、先生のことバカにしてなかった？」

「いえ、してないっすよ。気のせいじゃないっすか？」

「そっか、ならよし。じゃあ今朝のホームルームを始めるから、大人しく聞くように」

ようやくホームルームが始まった。

しかし、ちょっとした連絡事項の合間合間に雑談をするもんだからちっとも進まない。

「そういう訳だから、みんなも下校時刻を守るように。門限は六時だから、部活の子たちも長居しちゃだめよ」

「えー、六時っていったらすぐじゃんかー。大河センセー、それって運動系は免除されないの？」

「されませんっ。それと後藤くん、先生のこと藤村先生って言わなくちゃダメなんだから。次に名前で呼んだら怒るからね？」

「はい、以後注意しまーす」

いや後藤、お前、全然注意してないだろ。

……なんて甘い。

藤村先生は怒るといったら怒るのだ。相手が先生だろうと生徒だろうと関係ない。

俺も調子に乗ってやられたから断言できる。あれは限りなくマジの最後通牒だ。

そのことに気づけないようじゃ死ぬぞ、後藤。

「それじゃー今日のホームルームはここまで。みんな、三時限目の英語で会おうねー！」

手をヒラヒラさせて去っていく藤村先生。

二年C組担任、藤村大河。

あだ名はタイガー

大河なんて名前がついてるからそう親しまれているのだが、藤村先生本人はタイガーというあだ名を嫌っている。

藤村先生曰わく、女の子らしくない、とか。

まず自分の行いを見てから言え、と俺は声を大にしていいたい。

「授業を始める。日直、礼を」

そうして、藤村先生と入れ違いで一時限目の先生が入ってくる。

藤村先生が時間ギリギリまでホームルームをするせいで、うちのクラスはの朝はいつもこんな感じだった。

そうしていささか慌ただしい俺の日常が始まる。
剣とか魔法とかがない普通の日常が。

俺と非日常 (前書き)

カムバック、俺の日常。

俺と非日常

曇天の空に雨がシトシトと降っている。

その空の下、少年と『破壊』という概念を生物の形に押し込めた黒き龍のような異形の生物が対峙していた。

かつて荘厳であつた城は天上を引き裂くような衝撃によって基盤を残し瓦礫と化している。

そして、その残骸の中、何体もの巨大な魔物の亡骸が突き立オブリエのように倒れていた。

その中には少年と共に乗り込んできた仲間も倒れていたが、全員なんとか生きてるらしい。少年は視線だけを周囲に走らせて全員の無事を確認するとその顔に安堵の色を浮かばせる。

少年は、満身創痍であつた。豪華な軽装の鎧は辛うじて体に引っかかっているだけで着ている服も灰になる一歩手前だった。

———そこまで考えを巡らせてふつと俺は気がついた。
これはかつての俺だ。魔王との最終決戦。物語のラスト。

昔の俺が心はまだ折れてはいないとばかりに黒き龍を鋭く見据える。

「まだ立つのか……勇者よ」

黒き龍——魔王が、語りかけてくる。その姿は相對した当初の人の姿を大きく逸脱していた。

「…………それがテメエの正体か。とんだバケモンがてできたもんだ」

そういつて俺は砂まみれの髪を掻き揚げ皮肉げに笑う。

「『極光の守護』（アルティマ）も破魔の服もおじゃんか」

そう言つて僅かながらに張り付いていた鎧の残骸をはずす。

「この世界は腐っている。特に人間という種族はその権化だ。自らを最も優れた種族だと思ひ上がり他の種族を輕んじ、虐げる。そういう存在なのだ人というものは。異なるものを排斥し、欲望のままに他者を虐げ、大義名分さえ整えば手段さえも選ばん」

魔王——『終末の影』と呼ばれ最早自分自身の名前さえも忘れ去った絶対の存在が俺の言葉に意を介さず、悦に入ったように己の存在意味を謳いあげる。

「故に私が生まれた。人よ滅べと世界中の生とし生ける者が望み、そして世界が私という形を生み出したのだ。貴様もそうは思わなかったか？ 身勝手な理由で今までの日常を捨てさせられ、生死をかけた戦いに放り出されたのではないか」

魔王は自らに立ち向かう俺に対して同情の念を送った。

「確かにな」

俺はどこか自嘲じみた笑みを浮かべる。

「俺も確かにそう思ったさ『終末の影』。どうしてこんなことをしなくちゃいけないんだ、そう思いながら空っぽの身体で何度も何度も迷いながらも剣を振った。それでも、人の業を見せつけられ、苦しみながらも俺は戦い続けてきた……それが約束だったからな」

そこまでで言葉を切って倒れたままの少女を見る。すると意識が戻ったのか、彼女はゆるゆると顔を上げどこまでも蒼い空のような——俺の好きな色の目と視線があった。

言葉は、いらなかった。

ただ俺は安心させるように唇のはしを上げ、彼女は満面の笑みを浮かべる。

それだけで心はつながった。

「けれど、そんなクソったれな世界でも助けあって生きる者達がいる。生命を慈しみ、育む者達がいた。全てを投げ出し大切な人を守る者がいた。それは確かにこの世界にあってそれに触れる度に俺の身体のなかに何かが積もり溜まっていくのを感じた。そうしたものが積み重なり、俺の剣には迷いが無くなったんだ」

俺は胸に手を当て、誰でもない自分自身へと語りかける。そして、腕をうごかし、瓦礫に突き刺さった大剣を握った。

「くだらん……そんなものは所詮自らを取り繕った偽りの姿だ。人は、その本質からは逃げられん。そんなものはただの児戯にすぎん」

魔王は俺の言葉を嘲笑する。

俺は、自分の背丈ほどあるその剣——『輝ける希望の剣』（

レディアント・デザイア）を軽々と振り抜いた。

——それは、人々の希望を世界が編み上げ鍛え上げた、魔王と対をなす、運命の剣。

埋もれさせていた瓦礫が、積み木の玩具のように軽々と飛び散った。

「あと、残ってんのはこの剣だけか………まるで一番始めに戻ったみたいだ」

——三年前と同じく、俺は聖剣だけを携え、立っていた。

「感謝するぜ、魔王。余計なもの全部取っ払ってくれてよ」

俺は剣を握りなおし、切っ先を、魔王に向ける。

俺は認識した——あの何一つ持ちえなかった頃に思った原初の気持ち………勇者として立ち上がるための核となった気持ちを。

——私達の世界をどうか、救ってください——

彼女にかけられた言葉が全ての始まりだった。

「まったくもって、その通りさ『終末の影』。人間っていうのは口でもないヤツばっかだよ。俺も含めてな。そりゃ世界もその馬鹿さ加減には呆れるだろうよ」

俺は認める。誤魔化すことも偽ることもせずただ受け止める。

俺——笠原輝一はそんな瑣末なことでは芯は揺るがない。

「だからなんだ。俺は人類や、ましてや世界のためになんかに戦っちゃいねーよ」

ニヤリと俺の唇が皮肉げに曲げ、眼前の敵を見据える。

「俺はただ惚れた女の願いを叶えに来ただけさッ!!」

「フフフフ、………ア—ハッハッハッハ—! そうか、貴様は世界でなく一人の女を選ぶか!! いやはや、なんとまっこと貴様は勇者らしくないな、笠原輝一。よかろう、希望（貴様）か絶望（私）かどちらがこの世界には相応しいか、存分に競い合おうではないかッ!!」

黒き龍が蠢く。大地が震え、一面の瓦礫が脈動する。

その圧倒的な力の渦の中で俺は思い出す。彼女と初めて会った日のことを。

ただ言葉が出なかった。

一途な願いが綺麗だと感じた。

彼女のためなら神さえも砕こう、そう本気で思った。

——俺は、彼女を選んだのだ。

「さて、……………覚悟は充分か魔王。今からテメエを斬りにいくぜッ
！」

ただ一人、ただ一振りの剣を持ち、勇者が駆ける。

その声にも表情にも一片の曇りはなく、楽しげな笑みさえ浮かべ、
勇者は魔王へと向かっていった。

——世界を救うために。

——ただ、愛する人の願いを叶えるために。

「なっつかしー」

俺はそう声にだし、身を起こした。

窓から朝日が差し、顔に当たる。

……………本当に懐かしい夢を見たな。

あれからもう三年。奇しくも魔王を倒した年数と同じ年数が過ぎ去った。あの時、確かにあった熱は時間が流れると共にだんだんと醒めていってしまった。あたかも生きてた人間が冷たい死体へと変わっていくように。いや、多分そうなのだろう。あの世界から元の世界へと戻って勇者である輝一は死に、ただの笠原輝一が残った。

戦いの日々は色褪せることない思い出に変わり、ただ証として聖剣を残して。

何も起こらない日常、変化のない日々。それは、確かに俺の望んだ世界だった筈なのに時々どうしようもない虚しさが心を満たす。

それは残していくしかなかった彼女への想いがそうさせているのだろうか？ それとも――

「あーあ、やめやめ。今更考えた所でなんも変わんねーし。それよりもメシだメシ」

緩く首を振り気持ちを切り替えて一階のリビング向かう。

そこには出来たての暖かい朝食が――

「…………メシがねえ」

変わり置いてあるのは紙一枚。そういえば今日はまだ誰とも会っていない。いつもならバタバタ忙しいペアレンツがいらっしやるはずなのだが。

紙を手にとってみる。どうやら手紙のようだった。

『愛しき息子へ』

恐らくこの手紙を見ている頃には私達ここにはいないだろう。何故なら……………なんと！！ 商店街で家族でパリ二週間の旅に当たったのでしたー！ \ (^ _ ^) /

という訳で一週間前からコソコソ準備して今日から行くことになりました。なので二週間頑張っただけ」

「オイオイオイ！！ 何だコレ！何ぞこれッ！！」

いやいや！ 何で相談もなかったの！？
なして俺だけハブ！？ なんか前からソワソワ落ち着きないと思ってたけどコレのせいだよッ！！

「いや、それよりもこれからメシどうすんだよ！？」

料理なんて出来ねーよ。勇者やってた頃も全部任せっぱなしだったし。

「ん？ もう一枚あるな」

もしかして、何か打開策でも書いてあんのか？

『PS, ご飯のことだけでこれでがんばって！ 一カ月一万で生活できるんだからこれだけあれば充分でしょ (笑) 』

紙の下からでてきたのは野口さん一枚。

「『(笑)』じゃねえええッ!!」 (怒)」

計算間違いもほどがあるわ! 千円って、一食二十六円!? うまい棒しか買えねえーじゃねーか!! しかも妙に軽い感じが余計に腹立つしッ!

俺は想像の中で腹立たしい両親の顔にワンパンチ入れつつ、クソの役にもたたない紙くずをゴミ箱にぶち込んだ。今までのシリ阿斯返せこのやろう。

結局、朝も昼も食わずに放課後を迎えた。青春真っ盛りの食欲旺盛な時期にメシ抜きはキツイ。腹が減るのに比例してイライラがつり、今日はやたらに不機嫌なワカメ野郎がこちらに絡んできたので思わず筋肉バスターを掛けてしまった。これで当分は女子との素敵な出会いがなくなったのは間違いないだろう。本当に今日は厄日だちくしょうめ。

ふて寝してなんとかお腹の空腹感を誤魔化そうとしたが流石に無理だったらしい。目が醒めてしまったので一人で真夜中のコンビニヘガリガリ君(定価六十三円)を買い、トボトボと家路へと急いでいたのだが、

「……………リア充滅びろ」

幼なじみと何故か黄色いカップを着た美少女を侍らした衛宮士郎君

に遭遇した。

「毎回毎回なんだよ、オマエは」

五月蠅い。これはモテない男子の魂の叫びだと何故わからん。

「輝一、貴方なんでこんな所にいるのよ？」

明らかに不機嫌ですよー、と顔に書いてある我らが幼なじみに簡潔に答えてやる。

「コンビニに今日の晩飯を買いにな。それより何でここにいるのかはこっちのセリフだ。馬鹿やろうども」

チラッとカップの美少女を見やる。なんかピリピリとした雰囲気醸し出し、かなり露骨に警戒されている。なんか涙が出てきた。

「ああ、俺たちはちょっと教会に行ってきたんだよ」

士郎の答えに少し驚いたがああ、そうか

「結婚するんですね。わかります」

「違うわよッ!」

顔を真っ赤にした凜が力いっぱい全否定なされた。

「ああじゃあ、そっちの美少女ですか。さすがリア充野郎。抜け目ないですね」

「ち、ち、違うぞ。セイバーとはそんなじゃない!」

今度は士郎が真っ赤になって否定した。あのカッパの美少女、セイバーっていいのか。

「まっ、どうでもいいや。もう俺帰るからお前達も早く帰れよ」

早く帰らないと夕食が溶けちまう。

そう思ってヒラヒラ手を振って家路へ急ごうとしたのだが。

「——ねえ、お話は終わり?」

幼い声が夜に響く。まるで謳うよなその声は少女のものだった。

視線を坂の上に向けてみる。

——酷く場違いなものがそこにはいた。

「——バーサーカー」

凜の呆気にとられた声が聞こえる。狂戦士がどういった意味かわからなくてもあの少女の隣に突っ立っている巨人の異質さは嫌というほど理解出来た。

アレは人間ではない。もっと違う何かだ。自然と背筋だけではなく体中が冷水に漬けられたように強張る。

それでも、いきなりワケわからん緊張状態に放り込まれて完全にこんがらがっていた頭でもわかった事が一つだけある。

もう二度とガリガリ君は買わねえ。

勇者、俺（前書き）

その力、顕現せよ。

勇者、俺

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

微笑みながら白い少女は言った。

その言葉を聞いた俺は普段なら問答無用で士郎を処刑して泣いて悔しがっただろうが、それは後ろの化け物が居なかったらの話だ。

こんな状況に追いやられたのはいつ以来だろうか？

ヤバイ、と頭の中で小さい俺が緊急時態の鐘をガンガン鳴らしてきやがる。

「——驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

舌打ちしながら、頭上の怪物を睨む凜。

ハッキリ言って意味不明だが、どうやら凜達の関係者らしい。一体何をやらかしたら年端のいかない少女と化け物に目を付けられるんだ？ 色々おかし過ぎて笑えてくる。

「アーチャー、アレは力押しでどうにかなる相手じゃない。ここは

貴方本来の戦いかたに撤するべきよ」

まるでそこにはいない誰かにしゃべりかけるような声。

「了解した。だが守りはどうする。凜ではアレの突進は防げまい。それに加え一般人もいるのだぞ」

「それでもなんとかするしかないわ」

もう、訳わからん。いきなり虚空から聞こえる声と平気で話す幼なじみ。カッパの美少女セイバー。そして少女とフラグ立てているリア充野郎。もういいや、考えても仕方ない。この局面を乗り越える事が先だし、その後士郎にでもプロレス技で体に聞けばいい。

そうやって俺は、今抱えてる問題を丸なげした。

「——衛宮くん。逃げるか戦うか貴方の自由よ。……………けど、出来るならなんとか輝一と一緒に逃げなさい」

「相談は済んだ？　なら、始めちゃていい？」

まるでこれから楽しい事が起こるような軽やかな笑い声。

少女は行儀良く、まるで舞踏会で行うようなお辞儀をした。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン——」

その名前に聞き覚えでもあるのか、凜の体が微かに揺れる。

そんな凜の反応が気に入ったのか、少女は嬉しそうに笑みをこぼし、

「——じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

有り得ないほど軽い殺害宣言を俺たちに出しやがった。

巨体が飛ぶ。

バーサーカーと呼ばれたモノがその体に似つかわしくないスピードで、坂の上から何十メートルという距離を一息で落下してくる——

！

「——シロウ、下がって……！」

月の下。

流星群のようなモノが落下してくる巨体にぶち当たる。

「■■■■■■■■■■」

正確に巨体を射抜いていく銀光は、紛れもなく『矢』による攻撃だった。

銃弾や、ましてやミサイルでもない。どれを取っても圧倒的にスペックで劣るはずの弓矢が何かの冗談のような威力を秘めて八撃も超高速で飛来する。

しかし、

「うそ、効いていない——！？」

黒い巨体には何の効果も及ぼさなかった。

『矢』をその身に受けながらも落下してたバーサーカーの大剣はいつの間にか黄色いカッパを脱ぎ捨て、その下の騎士鎧を露わにしたセイバーの见えない『何か』で火花を散らし防がれていた。

いや『何か』ではない。アレは……、

「剣か、しかも不可視の」

誰に聞かせること無く呟く。一目見て解った、いや感じたと言うべきか。アレは聖剣だ。しかも掛け値なしの最上位の。俺の中にある聖剣があの見えない剣と共鳴している。

「ふっ……………！」

「■■■■■■■■■■」

ぶつかり合う剣と剣。

力任せのバーサーカーの剣に見事な剣捌きでセイバーは打ち合っていく。さすが、聖剣の担い手と言った所か。

俺は今の状況を半ば忘れ、食い入るようにセイバーの戦いに魅入った。

「なるほど。魔力をブーストして剣の威力を上げているのか……………」

それなら納得がいく。ああいう戦い方ならば体格差は関係ない。魔力さえあればいい。最もその戦法は膨大な魔力が有ってこそ成り立つのだが。

「――」

何も魅入ってるのは俺だけではない。あの白い少女も、俺の両隣で呆然とセイバーを見つめている凜と士郎も息を呑み、見惚れていた。

「……………っ！　アーチャー、援護……………！！」

焦ったような凜の声に応じて、またも銀の光が放たれる。

銀光は容赦なく巨人のこめかみに直撃する。あの威力だ、戦車砲に匹敵するソレはいくら頑丈な体をしていたとて無事では済まないだろう。

「――取った……………！！」

凜の声にも歓喜の色が窺える。

間髪入れずに不可視の剣を薙ぎ払うセイバー。しかし。

それは、あまりにも凶悪な一撃によって、体ごと弾き返された。

「ぐっ………!!?」

飛ばされ、アスファルトを滑るセイバー。

それを追撃する黒い暴風と、追撃を阻止せんと翔る幾つもの銀光。

だが効かない。

機械のような精密射撃で射られた三本の矢は悉く巨人の体に敗れ去った。

「■■■■!!!!」

巨人は止まらない。

無造作に振るわれた大剣を、セイバーは強引に受け止める。

「セイバー………!!」

士郎がたまらず叫ぶ。

バーサーカーの一撃を受け止めたセイバーは、それこそボールのように弾き飛ばされ——だん、と坂の中頃まで落下した。

「——！」

目が眩んでいるのか。セイバーは地面に膝をついたまま動かない。

「——トドメね。潰しなさい、バーサーカー」

少女の声が響く。

黒い巨人は、悪夢のようなスピードでセイバーへと突進する。

「アーチャー、続けて……………！」

そう叫びながら凜は走りだした。

——セイバーに加勢するつもりなのか。

凜さ石らしき物を取り出し坂を駆け上がっていく。

止めようとしたが辞めておいた。考え無しに突っ込むとも思えない。俺が行ったところで邪魔にしかないだろう。

「Gewicht. um zu Verdoppelung——
！」

驚いた。ドイツ語だろうか？ 意味は分からないが確かに凜は黒曜石を空中にばらまき魔術を行使している。しかもかなりの熟練者のようでその行使は手慣れている。今まで幼なじみをしていたくせに気づけなかった己の才能の無さに少しだけ涙がでた。

それに加え空から雨あられと降り注ぐ銀光がバーサーカーを襲うが尚もその突進は止まらない。

「——なんて」

怪物、だ。

口に出さなくても士郎の言いたい事は解る。

あれは『屈強』とかそんな次元のモノじゃない。恐らく強固な魔術加護に守られているのだろう。この分だと再生効果もありそうだ。前に似たようなモノを纏っていたヤツを見たことがあるが、目の前

のモノと比べるとお菓子の付録並みにちやちい。

「いいよ、うるさいのは無視しなさい。どうせアーチャーとリンの攻撃じゃ、アナタの宝具を越えられないんだから」

響く少女の声。

薙ぎ払われる巨人の大剣。

それを凜々しい視線のまま剣で受け止め、セイバーは二度、大きく弾き飛ばされた。

——坂の上を何十メートルと吹き飛んでいく。

セイバーは一直線に、それこそ豪速球のように、坂道から外れた荒れ地へ叩き込まれた。

バーサーカーはそれを追ひ荒れ地へと突き進んでいく。

「…………おい、士郎どうする？ 今なら逃げれるけど？」

実のところ、俺はあまりセイバーのことを心配してはいなかった。あの先はたしか墓地だった筈だ。小柄なセイバーには有利に働く土地。うまく墓石を使えばバーサーカーを撃退も可能だろう。

「バカ言えッ!! あのままセイバーを放っておけるか……………っ!!」

「……………そう言うと思ったよ」

俺は僅かに唇の端を曲げて勢いよく走り始めた士郎の後を追っていく。

「セイバー———!」

士郎が勢いよく荒れ地に駆け込む。

「こっち……………! 前に出るとばっちり食らうわよ!」

「えっ、ちょっ……………!?!」

「ま、待て凜っ!! そんなに引っ張ったら……………っ!!」

凜が木の陰に引き込もうと俺と士郎の腕を勢いよく引っ張った。

が、この時ほど自分の運の悪さと凜の『うっかり』を呪ったことはない。もし、この状況を作り出した神様がいるのなら俺は怒りのあ

まりソイツにパイルドライバーを二十回連続でかけ続けてるだろう。

つまり、何が言いたいかと言うと、たまたま戦闘によって砕けた墓石が運悪く俺の足元にあって、偶然にも俺の腕を引っ張ったのは凜の利き腕であり、『うっかり』彼女は俺を引っ張る力加減を間違えたのだ。

その結果、俺は何かのギャグのように墓石に蹴躓きゴロゴロと出方を窺うためににらみ合っていたセイバーとバーサーカーの間に転がり出てしまった。

ふっ、と目を上げると巨大な体がこんにちは。バッチリと目があった。てしまった。

「……………あはは、は……………」

愛想笑いでごまかそうと時既に遅し。目の前の狂った巨人は岩の塊のような大剣を振りかぶっていらっしやった。

世界がスローで動く。

「……………くっ!」

セイバーが顔を歪め間に合うはずがないのにこちらに走り寄ってきた。

「笠原ッッ!!」

士郎の焦った声がか聞こえる。

「——っ!!」

凜が顔を真っ青にしながらこちらを見ていた。

……………なんて顔してやがる。まるで泣きそうじゃねーか。

もう目前まで大剣が迫ってきた。このままいくと俺の頭はザクロのように中身を撒き散らしながら死んでいくんだろう。

そう普通なら。ただの一般人である笠原輝一ではこの運命には抗うことは出来ずこのまま死んでいく。

だが、それはあくまで『普通』だったらの話。

魔術なんかなく、

夢もなく、

奇跡も無く起こりえない『普通』ならばの話だ。

だけど、そんなクソツたれな世界の『当たり前』には従えない。

こんな俺だけど死んだら悲しむヤツがいる。涙を流すヤツがいる。

そして何より、女泣かす男なんて最低だろ？

そうやって俺は笑う。三年前、勇者として数多くの敵と相対した時のように。不適に、素敵に、大胆に。なにより天敵として。

心の中で剣をゆっくりと引き抜くイメージをもって戦うための思考へとシフトしていく。

リリース・アウト
「抜刀、顕現」

その言葉により俺の身体の中からあらんかぎりの光が夜天を貫いた。

その光は暗闇から差す極光。絶望を希望へと変換する力。

その膨大なる光の渦にバーサーカーが一步、二歩と警戒して間合いを開ける。

轟！ と爆発したように光が飛び散り中にいた俺をこの世界に晒した。

見た目はさっきまでと殆ど変わらない。ジーンズに半袖の無地のシャツだ。だが、右手には柄も刃も装飾も全てが白銀で造られた巨大な大剣を握っていた。

—— 聖剣『輝ける希望の剣』（レディアント・デザイア）。

その剣こそが俺を世界を救った勇者にたらしめんとする力。

「ホントに久々だなこの感覚。まったく、もう二度と握ることはねーと思ったのにな」

そうやって俺は軽く大剣を振るう。

「」

この場にいる誰もが呆然とし呆気にとられていた。それは大剣を見てか、それとも大剣を握った俺を見てなのか。

俺はそんな事お構いなしに肩に剣を担ぎ目の前にいる巨人に話し掛けた。

「よう。美少女とのデートはもう充分だろ？ だからさ、今度は俺と一緒に遊ばねーか？」

「…………アナタ、何者？」

白い少女がキツい目をしてこちらを睨む。

「ああ、そうか。まだ自己紹介がまだだったな。俺の名前は笠原輝一」

そこで俺は一拍間を置きニヤリと笑って、

「――元、勇者だ」

そう、名乗った。

剣使いと狂人と弓兵と俺（前書き）

墓地がテロられました。

剣使いと狂人と弓兵と俺

side 勇者の幼なじみ

世の中には絶対に不可能な事が数多くある。その一つが英霊の打倒。人間の上位種とも言えるソレは神秘が薄まってきた現代の魔術では致命傷を負わすことができない。

だから、魔術師でも何でも無い只の一般人であるアイツではバーサーカーの前では紙くず同然のはずだった。

「――」

それがどうだ？ 突然、目を焼くような眩い光の渦の中から出てきたアイツはまるで別人。膨大な魔力を身に纏い、そして何よりもその手に握る白銀の大剣の内包する神秘は驚愕に値するものであった。

昔からの腐れ縁で小さな頃に家族を無くした私に輝一の御両親は娘のように接してくれて半ば私と輝一は姉弟のように育った。つまりアイツは陰に隠れ、裏社会の住人の魔術師である私にとっての日常の象徴なのだ。

馬鹿でマヌケでそのくせどこか放っておけない幼なじみ。

それが遠坂凜が笠原輝一に対する認識。

常に近い位置にいたはずのその姿。

だが今、銀の剣を携え、バーサーカーと向かい合ってるその背は何故か輝一がとても遠くに行ってしまったように錯覚させてしまい、私は無意識の内に奥歯を噛み締めたのだった。

side 輝一

「勇者、ですって？ 馬鹿にするのもいい加減にして！ いいわ、凜とお兄ちゃんの後に殺してあげようと思ったけど、先にアナタから殺してあげる。やりなさいバーサーカー！！！」

「■■■■■■！！！」

少女の声で狂った雄叫びを上げながら、巨大な石剣を凄まじいスピードで薙払う黒い巨人。

普段の俺なら確実に知覚できないスピードで迫りくるソレは俺の命を刈り取るのには充分な威力のをもって迫り来る。

しかし、

「オイオイ、そう何度も殺す殺す言うなよ——」

当たる直前、俺は突然掻き消すように消え、凶悪な大剣は空を斬った。

「——程度がしれるぞ」

タン、と軽やかな音を立ててバーサーカーの振り切った大剣の上降り立つ。

「そんな!?!」

少女が戸惑った声を上げる。

その声に反応しバーサーカーが俺を剣から振り落とそうとしたが、

「遅えっ!!」

一閃。

俺の切っ先はバーサーカーの目を横一文字に切り裂いた。

「■■■■■■ー！！！！」

黒の巨人の叫びが大地を震わすなか、俺は素早くその場から跳躍し、セイバーの横へと離脱した。

「」

危なかった。そう思いながら、汗で湿る手で大剣を握り直す。

今の一撃は正直に言って相手が油断していたからこそ与えられたものだ。

聖剣の加護で肉体も五感も人の域を軽く超えたはずだったのだがそれでもあの狂人のレベルにはまだまだ届いていない。

高速移動法である閃走にしても何度も使えば見切られるだろう。クソったれめ、こうして戦えるレベルにまでなって初めて相手のデータメさが解る。

「セイバー、聞こえるか？」

目線はバーサーカーに向けながらセイバーに声を掛ける。

「はい」

その姿に変わらず凜とした声。

「俺はあの後ろの二人を守りてえがどうしてもアイツら守り通すためには俺の力だけじゃ足んねえ。だからよ、俺にお前の力貸しちやくれねーか」

セイバーは俺の言葉を聞き静かに不可視の剣を構える。

「……………、私はシロウの剣です。だから私はシロウをあらゆる厄災から守ると誓った。しかし、今の私ではバーサーカーを打倒するのは難しいでしょう。ですから貴方の力を貸して頂けますか？」

セイバーの言葉に俺はニヤリと、引き裂くように笑った。

「上等ッ！！俺は笠原輝一だ。改めてよろしく」

「セイバーです。以後、お見知りおきを」

その言葉と同時にバーサーカーへ駆け出す。どうやら目の傷は癒えたらしく、不健康な赤い目がこちらを睨みつける。

「■■■■■■！！！」

バーサーカーが大剣を振り回す。その一つ、一つが大地を揺るがし、空を震わす。その暴力の塊に真っ向から合わせる事はしない。と言うか、したくても出来ない。だからこそ俺は、剣先を合わせ、相手の剣を自分の剣の上を滑らすようにいなしていく。

「……ぐっ！」

重い。一太刀受ける度に全身の力が根こそぎ持ってかれるようだ。

ギリギリと力を入れるために歯を食いしぼる。

「はあああああっ！！！」

とセイバーがバーサーカーの横合いから旋風のような太刀筋で果敢に切りかかる。

飛び散る火花。

バーサーカーは俺とセイバーの両方を器用に捌きながらその圧倒的な火力で逆にこちらを押し切ろうとしている。

俺たちが剣と剣を合わす度に周辺の墓石が何かの冗談のように吹っ飛ぶ。

「——ッ!!」

コレじゃ埒が明かねえ。俺とセイバーはさっき出来たばかりの即席コンビだ。コンビネーションなんてないに等しい。今はまだなんとか誤魔化せるが、長期戦になるとボロがでる。だからこそ、ここで勝利をもぎ取るには短期決戦でしか有り得ない。

バーサーカーと剣を交えながら全身の魔力を循環、加速させ足へと一点集中し爆発させる。

グンと狭まる視界。

数十メートルあるバーサーカーの背後へと一瞬で走破する。

バーサーカーはまだセイバーとの打ち合いで後ろには対応出来ては

いない。

「だあああああッッ!!」

そのガラ空きの背中に渾身の一刀を加えようとしたが、

「■■■■■■■■!」

バーサーカーはセイバーを力で押し切った剣でそのまま近くの墓石を背後の俺に向かって碎き、吹っ飛ばしてきやがった。

「クソがッ!」

音速に近いソレを強引に引き戻した大剣で防ぐ。

ガゴン! と砲撃を受けたような衝撃で強制的に後ろへと押し戻されてしまった。

丁度セイバーと俺でバーサーカーを挟むような立ち位置で様子を伺う。

今までの激戦からは考えられないような静寂が周りを包み、冬の冷たい空気が熱くなった体を冷ます。

「今のを防ぐなんてな。後ろに目でもついてんのかよ」
小さく毒づく。

しかし、本当にいつ以来だろうか？ この血液が沸騰するような感覚。勇者として数々の敵と剣を交え、戦ってきたがこれほどの強者と出会うのは両手の数ほどだった。セイバーにしてもそう、あの疾風のような剣はウチの脳筋剣士と同等かそれ以上だ。

「…………フフン」

思わず笑みがこぼれる。まさかこんな平和を代表するような地方都市でこんな戦いを行えるなんて、夢でも見ているようだった。

一太刀受ける度に心の奥底で沈んでいた『何か』が思い起こされてくる。

まるで、今まで長い眠りにつかされていたものが叩き起こされるように。

……………ああ、そうか。

これは、戻っているんだ。

三年前に、身を粉にし、命を削りながら続けた戦いの日々。それが鮮明にこの身に写し出され、色を吹き込まれる。

「おかえり、勇者」

おかえり、俺。

今日、今宵をもって俺は戻る。

勇者に。

そして何よりもなくしちやいけない大事なもののために。

目を軽くとじる。イメージするのは比類無き一本の刃。鋭く、ただ冷たいたく神経を研ぎ澄ませる。

「————ッ——！」

セイバーとタイミングを合わせ、脚で大地を打ち抜くように踏みし

めてバーサーカーへと突貫する。

両極からの同時攻撃。

バーサーカーへと矢のように迫る。

黒き巨人を両断せんとせまる二本の聖剣。

「■■■■■■！！！！」

巨人は俺の剣を防がんと片手で岩の大剣をふります。

轟！ と剣と剣の接触の余波で剛風が吹き荒れるが剣は潰した。

大剣を俺を防ぐ為に使ったバーサーカーにはもうセイバーの剣を防ぐ手段がない。だからセイバーの剣が黒い巨体を斬り伏せるはずだった。

が、

「———そんなッ！！」

セイバーから漏れる驚愕の声。

バーサーカーは自らの手が傷つくのもお構いなしにセイバーの剣を折らんばかりに握りしめてその剣を止めていた。

「■■■■■」

すぐに傷が癒えるバーサーカーだからこそ行える行動。

バーサーカーは剣を握りしめたままセイバーをあらんかぎりの力で放り投げた。

しかし、ただ放り投げたとしても投げた相手があの人だ。セイバーがいくら頑丈でも凄まじいスピードでぶっ飛んで地面に激突すればひとたまりもないだろう。

「させるかよッッ!!」

すぐさま俺はバーサーカーの剣を払いのけ、三度目の閃走を使用。

セイバーが地面に激突するよりも早くセイバーと地面の間に身体を滑り込ませる。

「——セイバーッ!!」

セイバーは俺の意図を瞬時に察し、空中で器用に体制を整え、地面

との間に差し込まれるように構えられた俺の剣にサーフボードのように乗る。

「ぐおおおおおおお——！！！」

セイバーが剣に乗った瞬間、体中から力をかき集めるように雄叫びを上げ、剣を水平に振り抜いた。

ブォー！！ と空気が弾けたような音を立てセイバーはミサイルのようにバーサーカーへと突っ込んでいく。

隕石のようなスピードが乗った強烈な一撃がバーサーカーの剣と激突する。

今まで決して揺るがなかったバーサーカーも余りの威力にぐらりと体制を崩した。

セイバーを剣で打ち出した俺はすぐさま魔力を脚から放出し、バーサーカーへ僅か四歩で到達する。

意識を集中させる。

世界が遅滞した。

体中の血が脈動する。

周りは静寂につつまれ自分の心音がやけに良く聞こえた。

一步、二歩目で剣に魔力を纏わせ、循環させる。

三歩目。その込めた魔力量の多さから僅かに聖剣が蒼く輝く。

四歩目。

脚を踏みしめ跳躍し、体を弓のように引き絞り、聖剣を振りかぶる。

「これでシメーだあああああッッ！！」

セイバーの攻撃によってガラ空きになったバーサーカーの黒い巨体に真正面からの斬撃。

聖剣に込められた膨大な魔力がインパクト時に爆発し破壊力を増す。

轟！ とまるで地震が起こったように地面が震えた。

—— 決着。

斬撃によって巻き起こった砂煙でバーサーカーは視認は出来ないがアレは確実に攻撃が入った感触だった。いくらあの頑丈という言葉人を人型にしたような怪物でも暫くは動けまい。

—— これで引いてくれると嬉しいだけだな。

そう思いカラカラに乾いた唇を舐めたその時だった。

ゾン！ と遙か遠くから殺気を感じた。

一瞬バーサーカーのか？ とも思ったがこれは違う。

バーサーカーの殺気が無差別で巨大な岩の塊と表すならコレは剣だ。

長い年月、ただ熱く熱せられ、鍛え続けられた剣。

そこに俺やセイバーの聖剣のような美しさはない。

ただ無骨に目的を達成させるためだけに作られた機能的なものを感じた。

スツと殺気に向けられた場所へと視線を向ける。

背後。

何百メートルと離れた場所、屋根の上で弓を構える赤い弓兵の姿を見た。

「」

ぶわっ、と全身から冷や汗が出た。

ヤツが構えているのは、弓だ。

今までと何も変わらない弓。

直撃したところであの黒い巨体には傷一つ負わせられない物。

「」

しかし、俺は視た。

アイツが『矢』として装填しているものは、異質であり。

その殺気の標的は、バーサーカー一人ではない。

次の瞬間。

「セイバー——つつつつつ！……！！！！！！」

と物陰から飛び出し、

「な、シロウ——？」

戸惑うセイバーを抱いて横っ飛びしたのと、

「――輝一ツツツッ！！！！　今すぐそこから離れたなさいっ
！！」

凜の声で慌ててその場を離脱したのはほぼ同時だった。

シュン、と今までと何ら変わらない空気を切り裂く音と共に『ナニカ』が放たれる。

今まで何の効果も出さなかった弓兵の矢。

ボロボロになりながらもそのような物、防ぐまでもないと向き直る黒い巨人。

だが、その刹那。

「■■■■■■■■■■」

黒い巨人の影は俺たちに背を向け、全力で迫り来る『ナニカ』を迎撃し――

――瞬間。あらゆる音が、失われた。

「――！」

とっさに聖剣を地面に突き立てその影へと隠れた。

今までとは比較できないほどの衝撃が剣越しに伝わる。

肌を焦がすような熱を感じた。

熱風で弾き飛ばされた様々な破片は四方に跳ね飛ばされ、カーンと甲高い音を立てて剣に突き刺さる。

「な——んだよ、コレは」

なんとかやり過ごせた後、口からでたのはそんなチープな感想だった。

内容は実に簡単な事だ。赤い弓兵が放った『ナニカ』によって墓地が一瞬のうちに炎上した。それだけ。

爆心地であつたろう地面が抉れ、クレーターが出来ていた。

それほどの破壊をあの赤い弓兵が巻き起こし。

それほどの破壊力を以てしても、あの巨人は健在だった。

というか、

「俺の剣撃もほぼノーダメージかよ……………っ」

自信を無くしそうだった。

火の粉が夜の闇に溶けていく中。

黒い巨人は微動だにせず炎の中に佇み、居合わせた者は声もなく惨状を見据える。

火の爆ぜる音だけが耳に入る。

警察が来たらどう言い訳しようか、と思った矢先。

「ん……………？」

カラン、と乾いた音を立てて近くでセイバーを庇うように伏せていた士郎の前にあの赤い弓兵が放たった『ナニカ』が転がり出てきた。

「……………剣……………?」

士郎の呟きが聞こえた。

否、それは『矢』だった。

豪華な柄と、螺旋状に捻れた刀身をもつ矢。

……………まるで、剣を無理やり改造して矢として放ったような異質さだった。

バーサーカーによって叩き折られた矢は、炎に溶けるように消えていく。

跡形もなく消えていったソレはうたかたの夢のようだった。

「——シロウ、今のは」

「……………アーチャーの矢だ。それ以外は分からない」

戸惑うようなセイバーとどこか呆然とした士郎の会話が耳に滑り込む。

「…………ふうん。見直したわりん。やるじゃない、アナタのアーチャー」

何処にいるのか、楽しげな少女の声が響く。

「いいわ、戻りなさいバーサーカー。つまらない事は初めに済ませうと思ったけど、少し予定が変わったわ」

…………黒い影が揺らぐ。

炎の中、巨人は少女の声に応えるような後退しだした。

「———なによ。ここまでやって逃げる気？」

止めてくれ凜。もう俺のライフはゼロに近いんです。そのままそつとしいてあげて欲しい。

「ええ、気が変わったの。セイバーはいらないけど、アナタのアーチャーには興味が湧いたわ。だから、もうしばらくは生かしておいてあげる」

巨人が消える。

白い少女は笑いながら、

「それと、勇者様。今日はアナタのおかげでスゴく楽しめたわ。次会った時もまた遊んでね」

バイバイお兄ちゃん、と言い残して炎の向こう側へと消えていった。

……………イカン、完全に目え付けられた。

はあああ、と今年最大のため息をついた後、セイバーに庇った際に突き刺さった破片を抜いて貰っている士郎を見る。

「あ——っ、この、乱暴、もの——」

「自業自得じゃ。どアホ」

うるさい、と息も絶え絶えに言い返された。

ま、そんなに元気があるなら上等か。

「……………傷が塞がっていく……………なるほど、自身に対する治療法を備えていたのですね」

そう言いながら胸をなで下ろすセイバーの背後から士郎の傷を見る。

確かに、この速度はは普通では有り得ない。まるでその部分だけ巻き戻しが起こったような傷の治り方だった。

「……………?」

士郎の怪訝な顔を見ると自覚はなしか……………。だとすると生まれつきそういう体質なのかもしれない。治療費が不要なくてお得だな。

そこでもう一度深くため息をつき、奇跡的に無事だったコンビニの袋を拾い上げ、中からガリガリ君を取り出した。

般若のような形相で髪を振り乱しこちらに駆け寄ってくる幼なじみを横目で見ながら一口かじる。

「……………冷て」

ソーダ味はやっぱり美味かった。

剣使いと狂人と弓兵と俺（後書き）

初めまして、勇者マスオです。

今回のバーサーカー戦を以て一区切りとして後書きをつらつらと。

どうでしょうか？ 残念ながら自分は戦闘描写が苦手で予想外に時間が掛かってしまいました。ナンテコッタイ。

楽しめたなら喜ばしいですがダメだった場合にはスイマセン。

さて、こうして我らが勇者様は聖杯戦争などという厄介事に巻き込まれちゃったわけですが、まだまだ序盤な訳でして勇者様を襲う数々の不幸が手ぐすね引いて待ってます。大変ですよね。

とりあえず、これから衛宮邸にて質問大会という名の尋問が行われるのですがその前に勇者様のステータスを載せようと思ってます。ええ。

と言うことで次回は勇者様、丸裸の回です。

この作品が完成するまで時間がかかると思いますが末永くご贔屓にして貰えたら嬉しいです。

では、また次の後書きで。

俺のデータ
(前書き)

勇者、丸裸。

俺のデータ

名前 笠原 輝一

(かさはら・きいち)

職業 学生・元勇者

身長・体重

180 cm 73 kg

属性 秩序・善

能力値

筋力 B－ 魔力 A＋＋

耐久 C 幸運 D

俊敏 C 宝具 A＋＋

【保有スキル】

聖剣の加護 EX

世界より生まれ落ちた聖剣の加護を受ける。

筋力、耐久、敏捷、のパラメーター及び五感、第六感などの向上に加え、威圧、混乱、幻惑、といった精神干渉の無効、石化などを防ぐ高度な対魔力などを聖剣の所有者に与える。輝一が人の身で英霊と対等に渡りあえるのもひとえにこのスキルのおかげであることが大きい。がしかし、異世界から生み出された聖剣なので世界からのバックアップを受けられず幾分かその能力が減少している。

心眼（真） B

修行・鍛錬によって培った観察力。

常時、高速で思考を働かせ自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す『戦闘理論』。

逆転の可能性が1%でもあるなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せる。

魔力加工 A

セイバーの保有スキルである魔力放出とは似て非なるもの。武器、ないしは自らの肉体に魔力を帯びさせ、インパクト時に爆発させたり、魔力による刀身の延長などに加え、聖剣の補助で魔力を光に変換・加工・固定を可能にし戦略の幅を爆発的に広げる。光で構成されたものはその性質上、魔獣・人外には絶大な効果を得る。

カリスマ D

自分の仲間能力を若干向上させる。

勇者として魔王を倒す旅団のリーダーとして率いるには充分と言える能力値。

【宝具】

輝ける希望の剣

（レディアント・デザイア）

ランク…A++

種別…対軍宝具

レンジ…1～40

最大捕捉…50人

運命の剣。

人造による武器ではなく星に鍛えられた神造兵器。エクスカリバーがこの世界の聖剣というカテゴリーの中で頂点に立つ宝具ならばこの剣は異世界で頂点に立つ宝具である。

一度この聖剣に選ばればその所有者には絶大な力と絶対の加護を得ることができ、加えて魔力を光に変え、物質化させる能力を保有する。

普段は担い手のみが体内に持つ剣の座に保管され、必要な時に顕現される。

しかし、その強力な力ゆえこの剣が生まれると同時に世界がバランスを取るために反存在である『終末の影』と言う魔王を生み出して

しまった。

ゆえに聖剣の担い手であった輝一と魔王との戦いは世界の希望と絶望の戦いであったと言えるだろう。

使用技

閃走

輝一が頻発に使用する高速移動法。

魔力を身体で循環、加速し、脚へ一点集中させ爆ぜるように放出することによって絶大なスピードを得ることができる。

しかしその性質上、短距離で直進しか出来ず、連続での使用にも限度がある。

この技の正式名称は閃光のように走り抜ける俺様最高！！ 三号。

この技を輝一に直伝した脳筋剣士の命名だがそのあまりのネーミングセンスに戦慄した輝一は省略して呼ぶことにしている。ちなみに一号はないが二号はあるらしい。

【詳細】

かつて、ここではないどこか、即ち異世界に勇者として召還された少年。聖剣を携え数々の苦難を乗り越切り仲間と共に魔王を打ち倒した。

しかしそれはもう過去の話。今では完全にニート候補生。ダメ人間まっしぐら。

日々は平穏なりがモットーだが常に何かしらの騒動を起こすトラブルメーカー。学校では『A級戦犯』として教師陣に要注意人物としてマークされている。

魔術の才能はからっきし。しかしながら魔力量が常人の五〜六倍の圧倒的な量を保有していて、仲間のDS僧侶から『ポンコツ油田』と言われる程。

基本めんどくさがりだがなんだかんだ言って困ってる人を放っておけない性格。

輝一自身は普通に生活して将来は公務員かな〜とか思っているが、今回の聖杯戦争に巻き込まれてから人生がおかしな方向へ向かうのを本人はまだ気づいていない。

俺と楽しい楽しいお話会（前書き）

死ぬかと思いました。

俺と楽しい楽しいお話会

「――輝一」

ふと、鈴が鳴ったような声をかけられて前を向く。

目の前にいつも見慣れた顔――遠坂凜の姿が映っていた。

真新しい絹のような黒髪に大きくパツチリとした青い目や瑞々しい赤い唇、陶器のような白い肌は一つ一つのパーツがまるで一流芸術家によって作られたように端正で美しい。

なるほど、こりゃあ学園でアイドルにもなるわな。

そう漠然と思いながら何だ？ と目の前の幼なじみに問いかけてみる。

「ねえ、輝一。私、アンタにお願いがあるんだけど」

まるで恋人にでも甘えるような声。

……………そういえば、よく見てみるとその白い頬も上気し赤くなり、

瞳も若干潤んでるような気がする。

なんだこれ？　なぜこんな状況に？　これじゃまるで凜と俺が恋人
同士にでもなったみたじゃないか。

大量の疑問符が頭の中を幼稚園児なみのわんぱくさで駆け巡って処
理が追いつかない。

そんな絶賛混乱中の俺を尻目に凜が染み一つない白魚のような手を
俺の両肩にソツと乗せた。

え？　なにこれ？　何なのこの甘ったるい雰囲気。

思いがけず鼓動が早くなる。

金縛りにでも会ったかのように俺は身動き一つ取れず、じっと凜を
見つめることしか出来ない。

「あのね——」
小さな口が動き、肩に置かれた手がぎゅっと力をいれたのがわかつ
た。

その声を聞き俺の体は情けなく震え、汗がツゝ、と顎を伝う。

「――解剖させなさい」

「なにそれこわい」

あ、なるほど。この汗は冷や汗だったのか。

さて、俺がなぜ危うく我が幼なじみにショッカーにされそうな状況に落ちいったかのか、それは少し話を遡っていかなければならないだろう。

……………バーサーカー戦を無事に乗り切った俺達だったがその突然極度の緊張状態に放り込まれたせいだったのだろうか？ 士郎がめまいを起こしてぶっ倒れたらしい。

らしい、と推測系になったのは他でもないあのバイオレンス幼なじみのせいだった。

あの野郎、俺が守り抜いたガリガリ君を食ってたらいきなり足払いをかけ、そのままマウントポジションをとって俺の顔面に拳の嵐を落としてきやがったのだ。

しかもバーサーカー戦で出来た傷よりもボコボコにされた傷のほうが重いというなんともギャグみたいな感じになってしまった俺に無情にも気絶した士郎を士郎の家まで運ぶ事を命じたのだ。

……ひいひい言いながら重い士郎を担いでる間、凜に向けて何度地獄に落ちろと思ったかは計り知れない。とりあえず三桁はいつたと思う。

一時間程かけてようやく俺の家がハムスターの飼育籠みたいに思えてしまうようなバカでかい武家屋敷まで運び入れ、士郎の自室に寝かせたのだった。

とりあえず士郎が起きるまでは自由行動と相成り、どこか適当な所で寝ようかと久しぶりの戦闘で疲れ果てた重い体を居間に横たえようとすると俺に向かって凜は明日覚悟しなさい、と恐ろしい事を言ってきたが僕は聞こえませんでした！ アレ？ 作文！？

翌日。

昨日の事についての話し合い（尋問ともいう）をするためにいつまでもグースカ寝ている馬鹿野郎を脚を使ったスタンピングで叩き起こし、ブツブツ文句を垂れる士郎を連れて一階の居間へ向かった。

すでにセイバーと凜はスタンバっており、いつでもオーケーといった感じ。

だが。

「……………うっ」

士郎が小さく呻き半歩、後ろへ下がる。

それも無理からぬことである。なんたって居間に満ちている雰囲気
がヤバイ。

そう例えるなら砂漠で腹を空かした猛獣に囲まれたような、今にも喰い殺すぞーみたいなそんな殺伐とした気配がある一人の少女によって展開されていた。

……しかし、士郎もまだまだだな。このくらいの殺気、数々の修羅場を経験した俺にとって蚊みたいに些細なモノだ。しかも俺は勇者。勇者は勇気を持つ者と書いて勇者と読むのだ。しかも駆け出しのペーペー新人ならまだしも俺は世界を救った英雄だよ？ エリートなんだよ！ この程度の恐怖、臆せずしてなにが勇者か！！

「――笠原。オマエの膝がスゴく笑っているんだが大丈夫か？」

おい。いままでの描写が全てパーになっただろうが。どうしてくれる。

……………やっぱ怖いもんは怖い。だって目がアレなもの。今すぐにも俺を殺っちゃう感じだもの！

「オイ！ 本当に大丈夫か！？　なんか体中からガタガタと変な音が聞こえるぞ！」

いけない。あまりの恐怖に歯の根があわなくなってきたようなようだ。

「――輝くん」

発している殺気とは裏腹に優しい猫なで声。

顔は………ダメだ今見たら絶対泣く。

「な、なんでせう？」

「ちょっとそこに座りなさい」

そう言われて恐る恐る座る。無論正座で。士郎も空気を読んでか正座してくれている。ありがとう、士郎。後でガリガリ君買ってやるよ。

「私がいいたい事はわかるわよね？」

真正面から絶対零度の瞳で睨み付けられる。

「まあ落ち着けよ、遠坂。そんなにピリピリしてちゃ笠原だって話
しづらいだろ？」

そんな俺を見かねてか士郎がそつとフォローを入れてくれるが凜はそんなのお構いなしにバン、と机を叩き、

「そりゃあ、ピリピリもするわよ!! コイツが昨日何をやらかしたのか衛宮くん、ホントにわかってる!?! サーヴァントと戦って生きて帰れるなんて人間技じゃないわよ!」

今まで溜めに溜めたものを一気に吐き出したようにまくし立てた凜に思わず士郎は黙り込む。

「で、どうなのよ?」

セイバーは我関せずといった調子で一枚の絵画のように正座をして静かに目を閉じている。

完全に孤立無援。一生のお願いです。誰か、誰でもいいから俺をたすてけ。

「どうなのよって言われてもなあ。コッチは全然昨日の事把握しきれてねーんだぞ。サーヴァントって何? あの馬鹿でかい巨人は? なんでオマエが魔術師なんだよ? どうして殺し合いなんかしてやがる?」

援軍が期待できないなら自分でなんとかすべし。とりあえずこちらに命のやりとりをしてんだ。それ相応の知る権利があると思うんだが。

「……………はあ。仕方ないわね。じゃあ、まずコッチから話しをしましょうか」

ただし、後でちゃんと話しなさいよね、と釘を打ってから話しはじめた。

「私たちは聖杯戦争っていうゲームをしているの。あらゆる願いを叶える万能の器、聖杯を巡り七人の魔術師と七体のサーヴァントが殺し合うバトルロワイアルをね」

「はあ？ 聖杯？ アレってキリストの血を受けた杯だろ？ 別に願いを叶えるとかそういう機能はないぞ。だいたい聖杯ってのは本来、キリストの子孫を表す意味として使われてたはずだ」

「別に本物って訳じゃないわよ。あくまでも便宜上そう呼んでるだけ。本来は大規模な魔術儀式なの。それは大体五十年周期で巡ってくる。まあ、今回は十年って最短周期だったけど。そして今までされてきた聖杯戦争は計五回。つまり正式に呼ぶなら第五次聖杯戦争ね」

ふーん。百年も前からこんな殺し合いをやってんのかご苦労なこっ

て。

というか、魔術師って人種はみんなこんなヤツばっかなのか？うちのドM魔術師の研究もおかしなモノが多かった気がするけど。

「……………なんでだろ？ 思い出したらなんだか涙が出てきたよ。お母さん」

「ちょっと、なんでアンタ泣いてのよ？」

スマン。いらん思い出を思い出したみたいだ。

心の汗を拭いながら怪訝な顔をする凜にどうぞ続けて、と先を促す。

「次はサーヴァントの事についてね。サーヴァントってのは簡潔に言うと過去・現在・未来で名を馳せた英雄の事なの」

「はあ？ ちょっと待て。つまりあれか？ 英雄ってスネークとかマスタング大佐とかヤムチャとかそういうの？」

「……………なんでそこでアニメキャラクターの名前しか出てこないだよ。オマエは」

士郎が呆れ顔でこちらを見てくる。
うるさいやい。ヤムチャの凄さも解らんヤツにつべこべ言われたく
ねーよ。

「まあ、色々言いたい事はあるけど、それで理解出来るなら構わな
いわ。つまり、それぞれ“自分の生きた時代”で名を馳せたか、あ
るいは人の身に余る偉業を成し遂げた人物がその死後人々に祭り上
げられ一種の精霊に近い存在になるの。そうした英霊たちを聖杯が
呼び寄せて召喚したモノをサーヴァントって呼ぶのよ」

なるほど、英霊はそれ相応に強力な力を保有しているから魔術師と
いえど生身の人間では対等な勝負にすらならない。だから戦闘をす
るにしてもサーヴァント同士をぶつけ合う事に終止すると。

なんかただのポケモンバトルにしか見えないのは俺だけだろうか？

「じゃあさ、セイバーとかバーサーカーとかって何？ どう考えて
も本名じゃなさそうだけど」

というか、そうであること祈る。チラッと凛の隣にいる少女を見や
った。だってあんな美少女にセイバーだなんて、俺が本人だったら
問答無用で改名してる。セイラとかそんな感じに。

「ああそれはね、真名を隠すためよ。英霊は確かに強力な存在だけど、それ故に弱点が記録に残ってる。名前を明かす——つまり正体を明かすって事は、その弱点も教えることにもなるの。でもそれだけが理由じゃない。聖杯によって召喚されたサーヴァントは七人いるけど、それぞれが“役割”に応じて選ばれてるの」

「クラス………？ ああ、セイバー 剣士とか弓兵とか？」

「そう。元々英霊を丸ごと召喚するなんて事本来は奇跡でも起こらない限り不可能なのよ。しかも、それを七人分、なんて聖杯でも無理があるわ。だからその解決策として聖杯は予め七つの器を用意して、その器に適合する英霊だけを召喚するの。その七つの役割が」

セイバー、

ランサー、

アーチャー、

ライダー、

キャスター、

アサシン、

バーサーカー、

「で、昨日戦った怪物はバーサーカーのクラスになるわ。理性をカ
ットして戦闘能力を飛躍的に上げる。これは本来弱い英霊が喚ばれ
るはずなんだけどアレは例外みたいね」

ということは、士郎がセイバーを引き当て、凜がアーチャーを召喚
したのか。それなら白兵戦はまず負けはしないだろう。まあ、これ
は曲がりなりにも“戦争”なんだから、安心は出来ないけどな。気
を付けないと背後からグサリとやられる可能性があるし。というか、
こちらが白兵戦主体である以上そっちの方が多いのかもしれない。

「他にはないのかよ？　なんかこれには注意しろー、とかなんとか」

「ええ、あるわよ。飛びつきりキツイのが。宝具って言ってね。い
わばサーヴァントのシンボルとなる武具の事よ。英雄は、それ単体
では英雄とは呼ばれない。宝具と英雄でワンセットなの。そのどれ
もが強力な切り札になるものよ。それこそピンチをチャンスに変え
るようなね」

隣で士郎が何かを思い出したように語りだした。

……士郎曰わくランサーの宝具を見た事があるらしい。その時ラン
サーが言葉を発した瞬間、大気中の魔力を吸い上げ、有り得ない軌
跡でセイバーの胸を貫いたそうだ。といってもそれだけじゃわかり
にくい。ここは実際受けた本人に聞いてみるか。

「それじゃあ、セイバーはどうだった？ 実際に受けてみた感想は？」

「そうですね。あの槍の効果は因果の逆転と見て間違いないでしょう。私がああ呪槍を回避しえたのも幸運でした」

因果の逆転。

つまりは“槍が命中している”という事象を先に発生させ、後から“槍を相手に放つ”という原因を導くのだ。だからどんなことをしても既に心臓に命中している事実は揺るがないため防御しようが回避しようが関係ない。

「なんだよソレ。アホじゃねーの？」

話は至極簡単。RPGのコマンド——『たたかう』とか『まもる』などが載ってる欄に『倒す』なんてふざけたコマンドが有るのと一緒に。敵が何してこようが確実に勝利をもぎ取れてしまう。そんな理不尽さ。

……もうヤダ。何だか馬鹿馬鹿しくて疲れてきた。

ハアと仕事終わりのサラリーマンのようなため息を吐く俺をよそにセイバーが宝具の説明を続ける。

「しかし、逆にこちらが相手の真名を知るチャンスにもなりえます。宝具とは、ある意味カタチになった神秘ですから。魔術の発言に詠唱が必要のように、宝具の発動にも詠唱——真名による覚醒が必要になる。だからサーヴァントが宝具の真名を口にすれば、そのサーヴァントの正体も判ってしまう」

ああ、そうか。英雄と武具はセット。持ってる武器が判ったら、必然的に持ち主の名前も判明するようになる。

まあ、宝具を受けて無事でいたならば、だけどな。

「まあ、これが簡略だけど聖杯戦争の全容ね」

「ふーん。大体は掴めたな」

そうやって凜が最後にそう締めくくり、聖杯戦争についてのレクチャーが終わった。

さて、

「まあ話はこれでおわっ「てないわよ？」痛い！痛い！頭が割れるうううううう！」

極めて自然に、流水のごとくこの会議をお開きにしようと立ち上がろうとしたら、凜にアイアンクローされてまた正座の姿勢へと強制的に振り出しに戻された。

「魔術師の基本は等価交換。解るわよね？」

「ハイ」

「こっちは誠意を持って聖杯戦争について説明した。だったらアンタも誠意を持って説明するべきよね？」

「イエス」

「じゃあ、話さない」

「イエス、マイロード」

やっぱり逃げ切れませんでした。

「……で、何が聞きたいだよ？」

「全部よ、全部。何でサーヴァントと対等に戦えるのか？ ああ魔

力は何なのか？ あの異常な神秘を内包した剣はどこで手に入れたのか？ 隅から隅まで詳しく話さない」

「——フ、良からうお前がそこまでのぞむのなら教えてやろうッ！！私ハ！巨乳がだいす——指はそっちには曲がらないいいいいいい！！」

ひどい。コイツせっかく俺が教えてやろうとしたのに指をあらんかぎりの力でサバ折りにしやがった。

「別にアンタの性癖なんてどうでもいいの。次にふざけた事を言ったらネジキルワヨ？」ダメだ。このままいくと俺の永久就職先がゲイバー一本に絞られてしまう。

「——」

一つ、息を深く吸い込み肺の中の空気を入れ換える。

背筋を伸ばし、胸をはる。

俺の雰囲気が変わったのを感じとったのか士郎も凜もセイバーも姿勢を整えた。

——これより話すのはもうすでに終わった物語。

ゆっくりと口を開く。

「さてさて、どこから話せばいいのやら。あんまり昔話つてのは得意ではないんだけどね。まあ、いいや。どれだけ俺が言葉巧みにこの物語を話そうがこの話が物語としての価値を高めるわけではない。これは報告レポートでもなければ小説ノベルでもないのだから。大体、仮にそんなことになったところで、俺は嬉しくともなんともない。」

そこで俺は一旦話を切り、乾いた唇をなめる。今まで誰にも話したことのない俺だけの物語を話すためか、柄にもなく緊張しているのが分かった。

「とりあえず、この物語は俺が良いにしろ、悪いにしろ多くの影響を受けた事は確かだろう。それくらいに当時の俺にとっては新鮮で斬新でそして何よりも凄惨だった。

ああ、だからといってあまり期待はするなよ？ 内容的にはお前らも聞いたことのある話だ。そこらの絵本にも載ってるような、一山いくらのよくできた、ありふれたお話。どこまでもハッピーエンドな英雄の物語。

おっと、そうだった。危うく忘れるところだった。形式上こういう話しをするにあたって誰が話したのかをちゃんと名乗らないと。もつとも、お前ら三人にとっては至極どうでもいいかもしれないが――

――俺はどこにでもいる高校生、ベスト・オブ・ザ・普通、笠原輝一。かつて勇者と呼ばれ、そう名乗ってたこともあったが、それはもう、昔の話だ。

良い思い出で悪い夢だ」

そう前置きして俺は話し始めた。

どうやって異世界に巻き込まれ、どのような覚悟で聖剣を握り、振るってきたか。

行く先々での出来事。どうやって仲間が集い、戦争を止めたか。

あますところなく、十全に、詳細に、完全無欠に語って聞かせた。

結果。

語り終わった後の反応が凜の「解剖させて？」発言に繋がったのだ。

ちくしょう。せっかく俺が珍しくシリアス路線を走ろうとしたのに邪魔しくさりやがって。

「いいじゃない。別にちよつこと切るだけだし、麻酔も打つから痛くないわよ？」

「なんだその軽い感じ。お前はいいかもしれないがこちとら一大事なんだよ」

それに肩がスツゴく痛い。顔は清々しいくらい笑顔だけど肩に置かれた手はこれでもかというぐらい万力のごとく握りしめられている。

「な、なあ遠坂。オマエ、表情と体の動きが一致してないぞ。それに解剖はダメだろ」

士郎が突っ込むが凜の迫力に腰が若干引き気味だ。

「フフフフ………………。アイス買いに行ったら、世界を飛び越えちゃいました？ 何、ソレ？ わたしをバカにしてるわけ？ こっちは一族を挙げて必死にたどり着こうとしてるのにアンタのお使い程度に負けちゃうの？ フフフフ——！！！」

なんか凜のプライドの基盤を壊しちゃったらしい。怪しい笑いを唇から量産しながら俺をガツクンガツクン前後に揺すり始めた。

っていうか、誰か止めてええええええ！！

俺吐き気そう！ 昨日のガリガリ君がリターンしてきそう！

「あば、あばばばばばばばばば、あば」

「ちょ……、大丈夫か！？ 輝一！！ オマエ泡吹いてるぞ！？
しっかりしろおおおおお！！」

「いけませんリン！ このままでは本当にキーチは死んでしまう！」

リンを止めたとき、キーチの心肺は停止していました。

大変真面目な顔でセイバーが俺にそう話してくれた。

もちろん冗談だと思う。

「んんっ。みっともない所を見せちゃたわね」

ごめんなさい、とどこぞのお嬢様みたいに取り繕う凜。

しかしながらも手遅れだ。

凜の一族の家訓に『常に優雅であれ』とかあるらしいが、眼科行つて目を洗淨してからもう一度考え直せと俺は小一時間くらい正座させて言いたい。

「それで、率直に訊くけど。衛宮くん、貴方これからどうするつもり？」

俺を亡きものにしようとしたのは凜の中では無かった事になったらいい。極めて自然に話を始めてきやがった。

一方、話を振られた士郎は自身の今後の自身の身の振り方を聞かれ、考え込むように少し黙った後、ポツリポツリと話だす。

「……正直、判らない。聖杯を競い合うって言うけど、魔術師同士の戦いなんてした事がない。けど――」

そこで覚悟が決まったのか士郎はスッと真っ直ぐな目で凜を見据えて、

「――この戦争で巻き込まれる人たちがゼロってわけじゃないだろ？　もしかしたら故意に巻き込まこむマスターがいるかもしれない

ない。だったら俺はそれを止めたい」

そう、言い切った。

「呆れた。自分からマスターは倒さない、けど他のマスターが悪事を働いたら倒すっていうんだ。衛宮くん、自分が矛盾してるって解ってる？」

「ああ、都合がいいのは分かってる。けど、こればかりはどんなに論破されても変えないからな」

「ふーん。問題点が一つあるけど、言っていいかしら」

凜はまるで童話にでてくる猫のような笑みを浮かべる。

……企んでる。あの顔は絶対ろくでもないことを考えてやがる。何度となく痛い目にあってきた俺にはわかる。

「い、いいけど、なんだよ」

士郎も感じとったのか返答がしどろもどろだ。

「昨日のマスターを覚えてる？ 衛宮くんとわたしを簡単に殺せ、

とか言ってた子だけど」

「――」

忘れるわけねえ。完璧に目え付けられたしな。

「あの子、必ずわしたちを殺しに来る。それは衛宮くんにも判つて
と思うけど」

「――」

「あの子のサーヴァント、バーサーカーは桁違いよ。マスターとして未熟な貴方にはアレは撃退できない。自分からは何もしないで身を守るって言うけど、貴方は身を守る事さえ出来ないわ」

そりゃあそうだろ。あんなもん死亡フラグが服着て歩いてるようなもんだし。あ、服は着てないか。

「――悪かったな。けど、そういう遠坂だってアイツには勝てないんじゃないのか」

「正面からじゃ勝てないでしょうね。白兵戦ならアレは最強のサー

ヴァントよ。きっと歴代のサーヴァントの中でも、アレと並ぶヤツはいないと思う。わたしもバーサーカーに襲われたら逃げ延びる手段はないわ」

「…………それは俺だって同じだ。今度襲われたら、きっと次はないと思う」

まあ、凜と士郎が単品で勝てない相手ならば――

「も、もしかして手を組むのか俺と遠坂が？」

――そういうことにはなるわな。一人で戦えないなら二人でつていうのは戦術の基本だし。

「勿論、同盟の代価は払うわ。マスターとしての知識も教えてあげてる。ああ、あと暇があれば衛宮くんの魔術の腕を見てあげてもいいけど、どう？」

随時と太っ腹だな。ドけちの凜にしては珍しい。

うーんと士郎は少し悩んだ後。

「――分かった。その話に乗るよ、遠坂。正直、そうしても

らえればすぐ助かる。セイバーも、それでいいよな？」

「ええ、マスターが決めたことなので反論はありません。わたしとしてもリンの協力はマスターにとっては必要だと思います」

「決まりね。それじゃ握手しましょ。とりあえず、バーサーカーを倒すまでは味方同士ってことで」

そう言った凜の手を握った瞬間。士郎の顔がぼー、と赤くなる。

「はーん」

うわ、なんつー意地の悪い顔だ。生まれてくるところ間違ったんじゃないの？凜。

「な、なんだよ。つまんないコト言ったら契約破棄するからな。するぞ。絶対するからな！」

甘いな士郎。こんないじりやすいポイント、あの凜が見逃しますわけないだろ？

「貴方、女の子の手を握るの初めてだったんでしょ？なんだ、顔が広いように見えて士郎ってば奥手なんだ」

ほら、来た。

「ち、違うっ！ そんなじゃなくてただ」

テンパる士郎。仕方ない、助けてやるか。これから仲間になることだしな。え？ なんの？ もちろん遠坂凜被害者の会です。

「そこまでにしとけ、凜。話が進まねーじゃねーか」

「そうね。変に意地はられても困るし、この位にしときましようか」

ムフフ、と人を喰ったような笑みを浮かべるコイツは絶対悪代官とか似合いそう。

「じゃ、まずは手付け金。これあげるから、協力の証と思って」

どこに隠し持っていたのか、凜はテーブルに一冊の本を持ちだす。

タイトルはなく、表紙は凜のイメージカラーであるワインレッド。

「わたしの父さんの持ち物だけど、もう要らないからあげる。一人

前のマスターには必要ないものだけど、貴方には必要だと思って」

じゃあ、失礼して、などといいパラパラとページを捲る士郎。

どうやら話はまとまったようだな。じゃあここが仕掛け時か。

「あの、士郎サン？」

「ん？ 何だよ」

士郎がこちらを向く。

「お願いがあるのですが——」

刹那。

俺の頭は畳の上にこすりつけられていた。

「——この俺を養ってくださいっ！っ！」

同級生に恥もプライドも全て捨て去り、情けなく土下座をする高校生がそこにはいた。

というか、俺だった。

「ええええええええ！？」

困惑する士郎。まあ、それもそうだろう。俺の土下座は弓道部の主将、美綴——通称姐さんに『全てを投げ捨てたような気迫がある』と言わせ、土下座キングの称号を手に入れたのだ。無理もない。

「——と、とりあえず頭上げろよ。というか、どうして突然そんな事言い出すんだ？」

そう士郎に言われて頭を上げ、昨日の置き手紙事件の全容を洗いざらい話した。

「——なんか、相変わらね。アンタのそこのおばさまとおじさまは」凜は毎回ウチの両親に振り回されてるのでまたいつものか、と呆れた調子だが、

「

士郎とセイバーにはいささかハードだったみたいだ。茫然自失している。

「——ま、まあ、そういう理由なら仕方ないよな。うん、仕方ない。そうだよなセイバー」

「——え、ええ。大丈夫です、キーチ。食事はちゃんと食べられます」

なんとも引きつった笑みでオーケーしてくれた。

衛宮家の優しさに全俺が涙した。

あの狂乱の会議の後、藤村先生から電話で昼飯持ってこいとラヴコ

ールがかかり、士郎は無理やりついてくるセイバーと揉めながら学校へと弁当を届けに行った。

つまり今、士郎の家にいるのは留守番を任された俺と凜だけなのだが。

どうしてだろう？ 夢にまで見た美少女とふたりきりなのに全くドキドキしないのだ？

あれ〜？と首を傾げているみる。

「ねえ、輝一」

しばらく考えていたその疑問だが、凜がこちらに話しかけてきたのを機にテレビから視線を外して声のする方へ向いたら簡単に解決した。

ああ、そうか。

「胸がないからか」

「殺すわよ」

毎度毎度感じるのだが、俺の土下座スピードは光を超えてると思う。

「——で、何か訊きたい事でもあるのか？」

「まあね。アンタ世界を救ったって言ってたじゃない？ その時どんな気持ちだったんだろうなと思ってね」
「どんな気持ち、か……………」

ごろん、と横になって改めて考えてみると。

「そーだな。楽しかった」

やっぱりこの一言に尽きると思う。

「楽しかった？」

凜が予想外の答えに驚いていた。まあ、わからんでもないが。

「そりゃあ、辛いこともあったけどさ、それこそ何度も死ぬような危険な目にもあってきた。でもさ——」

そこで俺は顔にハテナマークを浮かべる凜に向かってニヤリと笑い、

「――異世界で冒険だなんて、めったに出来ないだろう？　なら、楽しまなきゃ損だ」

そう、言ってやった。

「はあ、アンタのこと馬鹿だとは思ってたけれどここまでとは思わなかったわ」

呆れたと、呟く凛をよそに俺は中庭にでて外を見上げ、うーんと伸びをして身体をほぐす。

「本日も快晴っ」と

さて、今日も一日気張りますか。

俺と幼なじみの侵略戦争（インベーダーゲーム）（前書き）

グッバイ俺の家。

よろしく日本屋敷。

俺と幼なじみの侵略戦争（インベーダーゲーム）

日曜日。

それは青春を爆走する俺達学生が日頃のストレスを癒やし、明日への活力を養っていく日である。

街へ出てゲームセンターで遊んだり、ショッピングをするのもよし。

はたまた、土曜日から旅行にいくのもいいだろう。

いっそのこと家でゴロゴロするのもありだ。

各々が思うままに過ごし、心身ともにリフレッシュさせてまた明日から学業に勤しむ。

それが日曜日だと俺は思ってる。

だから、

「輝一、その鞆私の部屋に運んどいて」

「はあ!？　そんなくらい自分でやりや「なんか言った?」イエ、ナ

ンデモアリマセン」

断じて、こんな引越し業者まがいのことでは筋肉を酷使用する日ではないはずだ。

すがすがしい位に腹立つ笑顔を横目でみながら荷物を運び入れる。

着々と衛宮家に運ばれる凜の荷物と俺の荷物。まるでそれが土地を奪う為に来た侵略者のように見えて仕方がない。

「つか、家主に無断でこんなことしていいのかよ？」

「あら？ 別に無断じゃないわよ。同盟を結んだんだからこの位当然でしょ」

「そういうもんなのか……？？」

そのあっけからんと言ったようにどこか納得している自分があるのがなんか悔しい。

「それにしてもここって本当に魔術師の家なのかしら？ 分度器やフラスコの一つもないなんて信じられない」

プロ意識が高い凜はあまりの士郎の魔術師としてのポンコツっぷり

にくるものがあるらしく、忌々しいげに唇を曲げる。

「仮に魔術師じゃない家庭でも分度器位はもってる筈よね？」

「知らん、俺に訊くなよ。俺の家にはないぞ分度器なんか。小学校の時にアイスラッガーの練習して校長のズラぶっ飛ばした以来、行方不明だ」

「……………、アンタって昔からそうよね。訊いた私がバカだったわ」

呆れたように呟き、ジトつとした目つきでこちらを睨んでくる。

「アホか。お前、学校のハナタレ小僧だった時の恥ずかしい思い出が俺達を大人への階段へと押し出してくれるんだよ」

「アンタと一緒にしないで」

……………。

ほほう、つまりそれはアレか。私は貴方みたいに馬鹿な事は一切してないわよオホッホッホッホ！、とそうのたまうつもりなのか。この赤い小娘は。

「言ったな。凜」

よろしい、ならば戦争だ。

「な、なによ？」

「いやいや、お前は都合の悪いことは全部綺麗に忘れる体質だったな、と思い出しただけだ。何、ちょうど良い機会だろうから、この俺様がい出させてやろうではないか！！」

「はあああああ！？」

ズビシッ！！ という効果音がピッタリとハマるように指差しポーズを決めた俺の宣戦布告を聞いて、女の子としていかなものかというような奇声を上げ面白いように顔を真っ赤に染め上げる凜。

凜と俺の関係は一般世間で言うところの幼なじみの間柄だ。

小さな頃から食って、寝て、遊んでと両親の次に長い期間一緒に過ごしている。

そりゃそんだけべつとりと接着剤みたいに引っ付いてたら相手の色んな所が見えるわけで。

しかも、『うっかり』に呪われてるといふか、『うっかり』の権化としてどこかの寺に大仏として建立されて崇め奉られてもおかしくない位にワケのわからんところでよくミスをする彼女は、振り返りたくない恥ずかしいエピソードが山盛りてんこ盛りなのだ。

……一瞬、巨大な凜の仏像に大勢の人達が周りを囲んで拝み倒してるところが目に見え。

——『ウツカリ教』教祖、うつか凜！！

「——ブハハハハハハッ！！」

「な、何を笑ってんだアンタはああああッッ！！」

と、堪忍袋の尾が切れたのか、勇ましい雄叫びを上げながら俺の顔面に拳を叩きこもうとしてくる凜。

それを紙一重でかわす俺。つかかヤバイ。予想以上にツボに入ってしまった！！こ、呼吸が上手くできねえええええ！！

……十分後。畳の上で四肢を着きながら肩で息をしているバカが二人いた。つかか、何してんだ俺達。家主のいない他人様の家でやることじゃねえ。

「ゲホッ、ゲホッ——あ、危ない。危うく教祖様（笑）によって窒息死させられるところだった」

「アンタが勝手に笑ってむせたんでしょがッ！ それになによ教祖様（笑）って!？」

ぜーはー、ぜーはーとお互いに息切れしながら額の汗を拭く。

なんかもう、始まる前からもうHPが赤くなってるし。

心なしに遠くのほうでアームも聞こえるような気がする。

「……だが負けない！ 俺は、俺はア！！ 勇者なんだから——
——！！」

「こんなくだらない局面でそんな気概みせんな！ ああもう……
……！ なんで毎回毎回、コイツのアホな雰囲気になされてんのよ！
しっかりしろ！！ 遠坂凜！！」

片や魔王と対峙した時のテンション高さに騒ぐアホにもう一人は軽く自己嫌悪に陥り反省中のバカ。

そこはかたなく混沌とした領域を展開している俺達二人は、こんな感じのノリで十年来の幼なじみやっています。

この全力ではっちゃけた空間を正常に戻したのは「ただいまー」と
なんとも脳天気そうなこの家の主であった。

「どうやら帰ってきたみたいね」

ぼそりと呟いた凜にはすでに大暴れしていた大魔神の影はひとかけ
らも見あたらず、普段学校でよく見慣れた優等生の姿に華麗にジヨ
ブチェンジしていらっしゃる。

なんというか、いつもながら早い変わり身だな、オイ。本当に同一
人物かよ。

割と頻繁に見る俺ですらこう思うのだ。凜に憧れを抱いている男子
共が見たら詐欺罪で捕まるんじゃないのかこれ。

割と失礼なことをつらつら考えながらおっとり刀で二人を迎えるた
め玄関への長い廊下を歩く。

……………本当にでかい家だな。

士郎に聞いた所によると道場まであるらしい。もうここまでくるて
家というより屋敷に近い。なんか俺の周りには屋敷持ちが多くない
か？ 凜の洋館しかり、間桐の家もかなりデカいと聞かし一成に関
しては山寺だ。山まるまる一個。

もし、普通の企業戦士であるオヤジ様がこの現状みたらどう思うの
だろうか？ たぶん地味に家の端っこの方でしょうばてるんだろ
うな
あ、きつと。

そんな中、世の中の世知辛さを身を持って体験した俺を待っていた
のは、

「――」

頼まれてもいないのに、士郎達を出迎えてた凜と、

「ああ……………っっ!!」

この世の終焉を見たみたいな感じで絶望している士郎と、

「――??」

何だか状況をよく飲み込めていない困惑顔のセイバーに、

「――え？」

ぽかん、と驚いている紫色の髪をした大人しそうな少女の姿だった。

紫の少女は玄関の土間、凜は廊下。

二人はなんともいえない緊張感を持って、お互いを見つめていた。

「こんにちは間桐さん。こんなところで顔を会わせるなんて、意外だった?」

廊下から、少女を見下ろすように言う。

「――遠坂、先輩」

囁くような声。

少女は怯えるように凜を見上げている。

……ああ。この子が間桐桜ちゃんか、士郎のお世話をしている間桐の妹って。

実際見たのは初めてだが兄貴共々、美男美女だな、本当。性格の方は天と地ほどの差があるが。つかこんな可愛い娘に世話してもらったのかあのリア充野郎め、許すまじ。

「――」

いたたまれない空気の中、士郎の方へ視線を向けた。

たすけて、となんとも情けない顔でこっちを見てくる士郎。

――、スッと優しく視線をそらした。

いや無理だろ、コレ。

そんな声なき会話をしていた俺たちをそっちのけで二人はお互いだけを観察している。

「先輩……あの、これはどういう………」

綺麗というより可憐という言葉がぴったりな少女——間桐桜ちゃん
さんは助けを求めるように士郎を見つめた。

当の衛宮さんちの士郎くんはちらちらとこちらに視線をよこしながら、

「ああ。それが、話すと長くなるんだけど——」

「長くないわよ。単に、わたしがここに下宿することになった
だけだもの。そこの輝一と一緒にね」

ええ！？ と驚いている士郎を横目に、凜のヤツが要点だけをのたま
まいやがった。

「……先輩、本当なんですか？」

「いや、俺はそんなの聞いて——ハイ、ちょっとした事情があ

りましてうちに居ていただくことになりました。…………ごめん、連絡入れ忘れてて。驚かせてすまない」

うわーお。力技でこの居住権をむしり取りやがった。

いよいよ、本格的に侵略者チックになってきたな。俺達。

「あ、謝らないでください先輩っ。…………その、たしかに驚きましたけど、そんなのはいいんです、それより今の話、本当に——」

「ええ、これはわたしと輝一と士郎で決めた事よ。家主である士郎が同意したんだからもう決定事項なの。この意味わかるでしょう？
間桐さん」

「……わかるって、何がですか」

「今までの士郎の世話をしていたみたいだけど、しばらくら必要ないって事よ。来られても迷惑だし、来ないほうが貴女の為だし」

「——」

桜ちゃんはうつむいて口を閉ざしてしまう。なんかだんだん可哀想になってきたよ、うん。そりゃあ、あんなに強いウチの幼なじ

み様に立ち向かうのは酷だ。ここは助け船をだしておこう。

「別にいいじゃねえか。ここに居たって。つーか桜ちゃんもここしばらくの間は泊まっていけばいい。なあ、士郎」

「え——はい？」

「え？ ああ。まあ、もうすでにセイバー含めて三人も泊めてるし、別に構わないけど」

「ちよつ、ちよつと輝一、アンタ——」

困惑で目を丸くしている凜をよそにトントンとリズムよく会話は進む。

「……………本当に、いいんですか？ 先輩」

「ああ、いいよ。桜も泊まっていきたい」

おずおずといった様子で伺うように士郎の方に視線を寄越していた桜ちゃんはその言葉を聞いてフワリと花が咲いたように顔がほころんだ。

「あ、ありがとうございます！　よろしく願いますね、先輩」
じゃあ台所お借りしますね、と士郎に言った彼女は俺の方を向いて
律儀にぺこりとお辞儀をしてくれた。

さっきのローテンションとは打って変わって本当に嬉しそうに凜の
脇を通って居間の方へと向かっていく桜ちゃんの後ろ姿を眺める。

恋する乙女っていいなあ、ホント。

「——って痛たたたたっ！！　耳が千切れるっ！！　千切
れるううう！！」

ウンウンと、うら若き乙女の青春に対して、感慨に浸ってる最中に
なんか恨みでもあるのか、というほどのおもいきり凜に耳を引っ
張られた。

「てめえっ！！　愛の伝道師に対してなんという狼藉を！？」

「うっさい！！　アンタねえ、一体何考えてんの！？　これから
この家は戦場になるかもしれないのよ？　だからわたしたち以外の人
間を寄せ付けないようにって桜を窘めたのに、あれじゃまったくの
逆効果じゃない」

「あれで窘めたのか。俺はてっきり虐めてるのかと思った」

「そこ！　なんかつまんないコト言った、いま!？」

凜はじろりと、至極真つ当な意見を述べたパートナーを睨らんだが、向けられた本人はそれがどうした、とばかりに視線をものともせず、に肩をすくめる。

「率直な感想だよ。それより桜の事だ。どうするつもりなんだ、笠原。あの時はああ言ったけど、あいつは魔術師でも何でも無い普通の子で、聖杯戦争になんて巻き込むわけにはいかないだろう？」

「だからこそだ。俺達は今戦争をしてるんだぞ。あんな弱点、これ見よがしにそこら辺に放ついたら速攻で拉致られて人質行き。そんなことになるくらいなら初めから視界の中にいれとくべきだ」

戦争なんて人殺ししてなんぼって所だ。そんな状況下ではモラルはあつてないようなもの、頼るほうが悪い。

加えて魔術師なんてヤツはまず自分の利益を最優先に置いてる最たる人種だ。

そういう奴らが自分の願望がたった七人の人間を排除することで最短距離で叶えられるこの聖杯戦争は真正正銘の一生一代の大チャンス。

そんな躊躇いで全てを棒にふるなんてことは絶対に有り得ない。

「それに、こっちはサーヴァントは近距離のセイバーに遠距離アーチャーがダッグ組んでその上俺もいるんだぞ。そんなの相手に他のサーヴァントが真正面からお前らに挑むと思ってるのか？」

「確かに。私は白兵戦に関しては右にでるものはいないと自負しますが、知謀策略をめぐらすのは専門外です。キーチのいった通り用心に越したことはないでしょう」

俺の提案するプランにセイバーが同意する中、凜が俺の方に体を向けて腕を組んで言う。

「…………けど、アンタはそれでいいの？ 死ぬかもしれないのよ——
——ううん、それだけじゃない。アンタの事が表沙汰になれば他の魔術師も黙ってない。なんだって異世界のそれも宝具級の神秘の担い手だもの。標本にされて地下に保管なんて事もあるかもしれないのよ」

その言葉には、わかる奴にしかわからないほんの少しの後悔の色が混ざっていた。

まったく、さっきの桜ちゃんの事といい、士郎の事いいコイツはホント、不器用な奴だよ。そう、魔術師として自分を本当に誇りと思ってるコイツは本来こうして半人前どころか、殆ど素人である士郎の事など歯牙にもかけず、それどころか格好のカモとしての一番に倒すべき相手なのだ。

それをフェアじゃないから、と嘯き聖杯戦争の詳しい説明どころか、面倒を見るために同盟まで組むってんだから本当に素直じゃない。

でも、だからこそ。

「ハン、それがどうかしたか？ 見た目だけ美人の幼なじみが困ってんだ。手助けするのは当たり前だろ？」

コイツがもし、挫けそうになったのならば。

「——バカ。一言よけいなのよ」

「そーかい。そりゃあ悪うござんした。それでいいよな士郎とセイバーも」

「はい。私も曲がりなりにも騎士と名乗っているのです。その名に誓って、必ず守り抜いて見せましょう」

あの時、澄み切った空のような青い目を持った彼女が俺にしてくれたように。

「ああ、笠原がいてくれたら心強い。よろしく頼むな」

「んじゃ、ま！ つーことで一つヨロシク」

手を引き、大きすぎる重荷を背負ったその小さな背中を支えてやりたい。

そう、思った。

俺と幼なじみの侵略戦争（インベーダーゲーム）（後書き）

えー、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

長らく更新をすっぱかしてすみません。

ようやく最新話が出来上がりました。

うん。長かった、本当。

まあ、一応言い訳を並べてみますと、慣れない初めてのバイトに四苦八苦したり、リンドウさんを助けるためにハンニバルと戦ったり、アイルーたちと狩りしたり、カノンと一緒に世界樹を救ったり、デスレードカオスを倒して世界に平和をもたらしていたためなかなか時間が取れませんでした（笑）。

……………ってなんだこれ、殆ど遊んでただけじゃん。orz

メールをしてくださった皆さん心配して有難う御座います。返信がなかなかできなくてすいませんでしたm（＿）m

これからもぼそぼそとやっていきますのでたまに更新されてたら、『まあ、見てやるか』ぐらいの気持ちで見守ってくださいたら幸いです。

では、また次の更新で、かしこ。

勇者マスオ

俺とタイガー祭（前書き）

愛の伝道師（笑）

俺とタイガー祭

日も落ちすっかり夜になったの夕食時。

「ただいまー！ うー、寒い寒い、雪降ってきたよー」

ちゃーす、とばかりに藤村先生が帰ってきた。

どうやら士郎から聞いた話によると、昔ながらの馴染みのようで毎回、朝と夜、士郎の家で食事をするそうだ。

まあ士郎の弁当を食した身としては解らんでもない。なにしろ手が込んでるし、何よりうまい。そりやもう、どこぞのシェフか、つくらいに。実際実例として士郎が弁当を持ってきた時にはクラス一丸となって強奪してくるもんだから、生徒会で食べることを余儀なくされた程にだ。

「おかえりー。雪降ってたんだ。外」

「おかえりなさい。藤村先生」

「おかえりなさい。タイガ、お勤めご苦労様です」

「桜ちゃんもセイバーちゃんもただいまー！ 本当に今日は寒いわ。小降りだけどっこう積もりそいよ。わ、今日は鍋ものだ。さっす

が士郎。冴えてるじゃない。んー、気分もいいしお酒とかのんじやおっかなー」

などと言いつつ藤村先生は居間に入ってくる。

「お邪魔してます。藤村先生」

「うーいす。こんちはー、藤村センセー」

「あ、遠坂さんに笠原くんだー。どうしたの、士郎んちで会うなんて珍しいね」

……………？ え、それだけ？

そんな俺の困惑をよそにふんふんと鼻歌を歌いながら居間を素通りして台所へ。

「へえ、いいたらじゃない。雪身のたらは極上だっていうし、ますますお酒が似合いそう」

がちやり、と冷蔵庫を開ける藤村先生。
で。

中から取り置きしたバームクーヘンを取り出して、モムモムとつまんだあと。

「って、なんで遠坂さんと笠原くんが士郎んとこいるのか——
——！！！！」

大爆発。

「ちょっと二人とも！ お邪魔してますじゃないでしょ。こんな時間は何やってるのよあなた達。」

バームクーヘンをごくんと飲み込んで、藤村先生はドスドスと居間へ進軍していく。

「なにして、衛宮くんの家で夕飯をご馳走されてるのですが。そういう藤村先生こそ、チャイムも押さず上がり込んでくるなんて非常識ではないんですか？」

ちよつと腰が引けてしまうような勢いもなんのその。凜は澄ました顔でさらっと迎撃する。

「うっ……わ、わたしはこの家の監督役なんですっ！ しろ——
——衛宮くんのお父さんから任されているんですから、ここでは家族も同然なのっ！」

「そうなんですか。じゃあ改めて挨拶しますね。お邪魔しています、藤村先生。今日から隣にいる笠原くんと一緒に下宿させていただきますので、今後ともよろしくお願いします」

「げ、下宿うー！？ ちょっと士郎！！ コレはどういうことっ！
？ セイバーちゃんは仕方ないにせよ、同い年の女の子を下宿させるなんてどこのラブコメだい、ええいわたしやそんな質の悪い冗談なんかじゃ笑ってやらないんだから！」

下宿、という凜の言葉に更に暴走を加速させる藤村先生。

まあ、そりゃあそうだよな、青春真っ盛りの男女が同じ屋根の下で過ごすってのはいくら何でも許せる事態じゃないだろう。

「どうもこうも、俺がこの手の冗談苦手だって知ってるだろ。とにかくこの二人とあと、桜もうちに泊めるだ。文句は聞くけど変更はしないから言うだけ無駄だぞ」

「えええ！？ 桜ちゃんも！？ そんなの大却下！ な、なんのつもりか知らないけどダメに決まってるでしょう！ お、同い年の女の子と一緒に暮らすなんて、そんなのお姉ちゃんは許しません！」

があー、あだ名に恥じないくらいに吠える藤村先生。

でも、いくら言われようとも無理やりにでもこの案を通さないとい

けないのだ。その役目を背負った士郎の額に冷や汗が流れているのが分かる。頑張れ少年、応援はするけど助けることは無理だ。怖いから。

「いや、そこをなんとか。別にやましい気持ちなんてないし、遠坂とはそういう関係になってもないんだ。ただ、たまたま事故に遭ったっていうか、成り行きで部屋を貸すってコトになっただけなんだから」

「うるさい！ ダメなのはダメなのー！ー！ わたしは下宿なんて許しません！ 遠坂さんの事情は知らないけど、ちょっと帰ってもらいなさい！」

うん、全く聞く耳もってないな。

なんか、士郎の顔にも諦めムードが漂ってるぞ。

「先生。下宿は許しません、とおっしゃいますけど、わたしたちはもうすでに一泊してしまったのですが」

と。

藤村先生の顔に冷水をぶっかけるような台詞を、さらりと凜は口にした。

「——え？」

「ですから、昨日泊めさせていただいたんです。今は別棟の客間をお借りして、荷物も運んであります。どうでしょう先生。客観的に見て、わたしたちはもう、下宿してる状況なんですが」

「——」

さあー、と顔が青くなっていく藤村先生。

「し、し、士郎、アンタなんてコトするのよう……！　こんなコト切嗣さんが知ったらどうなるかわかってんの！？」

「どうなるかって、親父だったら間違いなく喜ぶぞ。男の甲斐性、とかなんとか言ってる」

「う………同感。切嗣さん、女の子にはとことん甘い人だったからなあ………そっか、それが遺伝してるんでしょ士郎のばかー！」

がくがく、と士郎の襟を掴んで体を揺さぶる藤村先生。

なるほど、端からみると今朝の俺もあんなだったのか。

ほう、と感心してる所で士郎は前後に揺さぶられながらも救援要請をしてきた。

「なに？ 助ける船、出してほしいの？」

……なんかこういう場面に遭遇すると、コイツも女の子扱いしなくちゃいけないなんて男って損な生き物だなんてつくづく思う。

「……………頼む。俺じゃあ、現状を打破出来ない。遠坂の政治手腕に期待する」

「オツケー。それじゃサクッと解決しますか」

「藤村先生。衛宮くんを振っても出るのは悲鳴だけですから、そのあたりで止めてあげてください。」

「む……………なによ遠坂さん、そんな真面目な顔したって怖くないんだから。教師として、なにより士郎の教育係として、遠坂さんの下宿は認めませんっ」

藤村先生は士郎から手を離して凜と対峙する。

野生の勘というヤツだろう。士郎にかまっけていては凜に寝首をかかれる、と察したに違いない。

「それは何故でしょうか。うちの学校には下宿している生徒も少なくありません。生徒の自主性を伸ばすのが我が校の方針ではありませんでしたか？」

「なによ、難しいコト言ったってダメなんだからっ。だいたいですね。こんなところに下宿したって自主性なんて芽生えません。ご飯は勝手に出てくる。いつもキレイ、お風呂は勝手に沸いてるっていう夢のようなお家なんだから、ここ。こんなところに居候してたら墮落しきっちゃうわよ。遠坂さん」

「…………だ、そうだが士郎」

「…………藤ねえ」

教師としていかなものかという藤村先生の発言に士郎がため息を吐く。

「それにね、原則として下宿していいの生徒は家が遠い生徒だけよ？ 遠坂さんのおうち、たしかにここより遠いけど登校できない場所じゃないでしょ。桜ちゃんもあっちから通ってるんだから、下宿する必要なんてありません」

「それが、今うちは全面的な改装を行ってるんです。古い建物ですから、そこかしこにガタがきてしまつて。改装が終わるまでホテルで暮らそう、と考えたのですが、偶然通りかかった衛宮くんに相談したところ、それはお金が勿体ないからうちを使えばいい、と言つてくれたんです」

スラスラと凜の口から出る嘘八百。本当に詐欺師だな。

「むっ……それは、確かに士郎っぽい発言ね」

「はい。あまり面識のない衛宮くんからの提案には驚いたのですが、確かにホテル暮らしなんて勿体ないし、なにより学生らしくありません。それなら学友である衛宮くんのおうちにご厄介になったほうが勉強になる、と思ったのです」

「む……むむむ、む」

凜の申し訳なさそうな顔加え完璧な答案に対して藤村先生は教師として反論が出来ないようだった。

「は、話は判りました。けど、それでも問題はあるでしょう？ 複数の男の子と女の子が一つ屋根の下で暮らす、といのはどうかと思うわ」

「どうか、とはどんな事でしょうか、先生」

「え……えっと、だからね、ほら士郎や笠原くんだって男の子だし、間違いがあったらイヤだなんて」

「何も間違いはありません。わたしの部屋は別棟の隅、衛宮くんの部屋とその隣の笠原くんの部屋は蔵の近くにある和室です。距離にしてみれば二十メートル以上も離れているじゃないですか。ここまです離れていれば何の問題はないと思いますが」

「う……うん、別棟には鍵もかかるし、違う家みたいなものだけど……」

「でしょう。それとも藤村先生は衛宮くんを信用していないとでも？ 先程、先生は衛宮くんの教育係だと仰いました。なら衛宮くんがどのような性格かは、わたしより藤村先生の方がご存じだと思います。それにそこにいる笠原くんとは十年來の幼なじみですし、その性格はよく知っています。それに彼らがそのような間違いを犯すと言うのでしたら、わたしも下宿先には選ばせませんが？」

間違いもなにも何かやらかしたら消し炭にするだろ、オマエ。

「失礼ね、士郎はちゃんとしてるもん！ ぜったいに女の子を泣かせるような子じゃないだから！」

「なら安心でしょう。わたしも衛宮くんを信用してますから。ここなら、安心して下宿できると思ったのです」

「むーーーーー」

どこか戸惑つように視線をさまよわせた藤村先生とふ、と視線があった。

あ、マズい。

「なら笠原くんはどうしてここに下宿するの？ 別に家に帰ってもご両親がいるものね？」

凜との勝負では旗色が悪いと悟ったのか今度はその矛先をこちらに向けてきた。

……なんて言うと思ったか。

確かに俺は凜よりも頭は悪い、それは認めよう。今更そんな所で鶏冠なんてたてない、大人ですから。ある時、英語の時間に担当先生に「お前だけ高校じゃなくて寺子屋に通ってんだな」と半笑いされた時だって「俺もそんな感じしてたんですよー。なんか俺だけ上靴じゃなくて、下駄だったんで。H A H A H A！」というウィット

に富んだ返しを出来るくらいクールなのだ。

しかしながら今回は相手が悪かったですね藤村先生、いやタイガー
ツッ！！

普段から口から生まれた男として数々の難局を言葉巧みに、口八丁
に出任せを口から量産し、全てを煙に巻いて巻きまくって鳴らした
俺に挑むなんて百年早いわ！！

それに加えて、今の俺はダンボール生活が後ろで体育会系の顧問よ
ろしく両手を広げながら仁王立ちして待ち受けているのだ。

正に背水の陣と言えるこの状況下では俺のスペックは普段の三倍に
増加、赤い彗星もビックリの口の速さの領域に達するツッ！！

さあ、覚悟はいいな、冬木の虎よ。

俺の口撃に惑いやがれ——！！

「ふふん、俺を攻略しようなんてまりやいまりやすぎぎだべっつ！
」

。 どうやら俺は英語の他に国語もダメだったようだ。もう意志疎通能力が原始人レベルである。

つーか、やべー。なんか変な空気になっちゃったよ。沈黙が痛いすぎる。

まともに前が見れねえええええ!!

大丈夫だよな? みんな笑って無いよね? まだ挽回できるよね!?

つーかもう笑えよおおおおお!!

「……………あの、もう一回だけ、やり直させて貰ってもいいですか?」

「…………ど、どうぞ……………」

今年、初っ端からの最大級に恥ずかしい発言だった。

「——で、笠原君はたいした家事スキルもないのに千円握らされ

てご両親に置いてけぼりにされた、というわけね？」

「概ねその通りです。ハイ」

改まって言葉にされるとんでもない話だ。息子差し置いて楽しい旅行にいくなんて。しかも隠れて準備していた所を見ると俺を置いていくの前提だし。

「でもね。別に泊まる必要はないんじゃないかな？ わたしみたいにご飯だけ食べにくらいいいじゃない」

ずいぶんアツサリと生徒に飯たかる宣言するがそれでいいのか教育者。

周りを見てみる。全員が全員なんとも言えない顔してんぞ。

「そうしたいのは山々なんスけどね。……止まってました」

「へ？ 止まってた、て何？」

「ガスとか水道とか諸々のライフラインが全部」

荷物取りに帰った時にせめてシャワーだけでも浴びようとしたらまさかの水。二月、真冬の冷水が保有する殺傷能力のハンパなさに死を覚悟するも、途中でその水も止まり、後に続くように浴室の電気

も消え、最終的に真っ暗なタイル張りの部屋で唇を紫に変色させて震える俺、という構図の出来上り。
一体なんの罰ゲームだ。ふざけんな。

「だいたい何だ。停電したから冷蔵庫の中身だけでもなんとかしようとして開けてみたら、キンキンに冷えたキュウリ一本ってお前………バツツカじゃねえええの！？となりのトトロじゃねえんだよツツ！！ 電報貰ったってテメェらの見舞いになんて行かねえーよ！！むしろねこバスの臍にローキックかまし続けるわツツ！！」

「どうどう……。と、とりあえず落ちつきなさい笠原君」

正座から右足を立ててヒートアップしている俺をどうにかなだめようと藤村先生だがここまで人におちくられたままでどうして黙らいでか。あの母親には一度本当に拳で語り合わないと気が済まないのだ。そうでもしないとこの怒りのやり場がなくなってしまう。

「そ、そうですよ、笠原先輩。お、落ちついてくださいっ！」

「ああ、そうだね。桜ちゃんの言う通りだ。男はクールにいかないとね」

居住まいを正して爽やか笑顔。
何事も平和が一番なのだ。桜ちゃんがいるだけで俺はガンジーになれる。右頬打たれてもヘラヘラ笑って左頬も差し出してみせよう！

……ゴメン嘘ついた。間違いなく俺はソレやられたら聖剣の刀身の平たい所で相手の顔面をぶん殴ってる。

「あれ、わたしと桜ちゃんとで態度が全然違うじゃない？」

なーんて藤村先生の無然とした声が聞こえてくるがそんなのどうでもいい。未だに俺の態度がぐると変わったことに目を白黒させている桜ちゃんの手を握りしめて、微笑む。

「桜ちゃんのお陰で俺は生まれ変わった。柔らかなその声を聞いているだけで俺の心は癒やされてしまうんだ。だから俺と結婚してほしい」

「イヤです」

超速かった。

即答だった。

あまりにも速すぎて『結婚してほしい』の『ほ』と『し』の間にはもう言い終わってた。

どんだけ嫌われてんだよ、俺。

「……なあ、セイバー」

「何でしょう。キーチ」

「俺、どこか悪かった？」

「一から十まで、足の先から頭のとっぺんまで全部ダメです」

なに言っただコイツ、みたいなしれっとした顔で緑茶を啜るセイバーによって魔王を前にしても決して折れなかった俺の不屈の魂は根っこから引っこ抜かれて丸ごと焼却炉に放り込まれてしまった。

……おかしい、何でか知らんが目が霞んで来やがった。アレ？
今日、雨なんか降ってたっけ？

ぼやけてよく見えない視界の中で藤村先生の方を向いてやっちゃいました、テヘツ、みたいな感じの照れ笑いながらを頭を掻く。

「先生の言う通りですよ。やっぱり年頃男女が共同生活するのはマズいですよね……。今日は帰ります。お邪魔しました。」

——生きててスイマセン」

「ちょ、ちょちょちよっと！！ ままま、待ちなさいッ！ 笠原君

！！ わかった、わかったから。していいから、下宿！！ つーか、しなさいっ！！ 今すぐに！！ そんな顔で出て行くと心配だからっ！！ 先生！」

慌てふためきながら玄関へ向かう俺の腰をガッチリとホールドして離さない藤村先生。なにしてんだ？ この人。俺がせっかく先生の忠告を聞いて家に戻ろうとしてるのに。

「離せよおおおっ！！ 別に気にしてねーしっ！！ 俺、超ポジティブだから！ アッチ（異世界）の方でも国際指名手配にされたことあったけど挫けなかったからね、俺。ルフィとお揃いだーとか言って喜んでたからっ！！ たかだか一人の女子に降られたくらいどーってことねーし！！ 本当だからねっ！！ だから今からちょっと車に惹かれて天に召されるけど、全然大丈夫！」

「どこが大丈夫！？ 完璧に死にいつてるじゃない！」

「お、おい。止めなくていいのかよ。遠坂」

「そ、そうですよ。いきなりああ言われたからあんな言い方になっちゃったけど、わたしにも責任があるような気がしますし……………」

「べつに桜が責任感じる必要はないわよ。いつものようにバカ（輝一）が馬鹿やっただけだから。放っておけば元に戻るわよ。でももう夜だし、いくらここ（屋敷）が広いからってあんな大声だして

近所迷惑もいい所よね。…………セイバー、あのバカ黙らせてくれる？」

「はい。わかりました、リン」

は、な、せー！ イ、ヤ、だー！ と壮絶な戦いを繰り広げてる俺と藤村先生の決着はセイバーが俺の後頭部を鮮やかな手際でぶん殴って強制終了となったのを薄れゆく意識の中で悟ったのであった。

あたしとアイツの周波数（前書き）

A
c
e
r
t
a
i
n
d
a
y

あたしとアイツの周波数

わたし、遠坂凜と笠原輝一の関係は一言で言えば幼なじみだ。腐れ縁とも言う。

さすがに相手の全部を知っているなんて傲慢なこととは言うつもりはないけどアイツの好みや思考傾向なんかは長年の経験から大体は予想はつく。それは向こうも同じようで時々というか、かなりの頻度でこちらの思っていることはわかるらしく繕うことの得意なわたしをドキッとさせる言動をとることもしばしば。

だからと言って不快か？ と問われたらそんなことはない。

アイツ曰わく背負いこみがちな性格をしてるらしいわたしの肩の力を適度に抜かせようとしてるようだ。本人はさりげなくやろうとしているのだろうけどコッチも伊達に幼なじみをしていない。アイツの考えなんて筒抜けだ。

でも、多分この考えさえも向こうは知ってそうだけれど。

お互いがお互いに相手の思っていることを感じ取るこの不思議な感覚は例えるならばそう、チャンネルのバッチリ合ったテレパシーというものだろう――

最近アイツの様子が変だ。

窓側の一番後ろの席を横目で一瞥する。

中学二年の夏休みも終わり、うだるような暑さが続く毎日が何かの冗談のように涼しくまた過ぎやすくなり、夏休み明け特有のけるさも次第に薄れつつあるそんな日。

授業と授業の間に存在するわずかな時間をグループを作ってお喋りしたり次の授業の課題を友達から写さしてもらったりと各々が思い思いに活用している中、わたしはもう一度だけ前の時間の教科書が散乱している隣の空席を見やる。

どうせまた、忘れ物でもして他のクラスに頭を下げに行ってるのだろうその席の主であるアイツを思い浮かべた。

次の授業はそういうことには厳しい先生が担当してるのはわかりき

ってるだろうに本当に学習ないヤツだ、なんて呆れる自分の思考に少しげんなりする。わたしはアイツの母親か。

まあ、昔からあっちゃこっちゃで騒動を起こす傍迷惑なアイツの横で何かやらかす度に頭をぶん殴ってガミガミと怒鳴りつけていたんだからそう思っても仕方がないのかもしれないけど。

「あつぶねええ！！　　なんとか数学の教科書確保したぜ！　さすが、俺。今日もツイてる！」

耳に馴染んだ、明るい声。

噂をすればなんとやら、本人のご登場だ。

ガタガタと建て付けの悪い扉を開き満面の笑みを浮かべたアイツはいたって何時もどうりだった。

そう、いつも通りのはず、なのに。

なぜかアイツの様子を見てどこか違和感があるのはわたしだけなんだろう？ それともただの思い過ごしなのか。そんなどっちつかずのモヤモヤした思いを抱えてるのにコイツときたら。

「ん？ どうした凜？ なんか機嫌悪そうだな？」

誰のせいだ。誰の。そう大声で言いたい気持ちをぐっところえて、小さく微笑む。常に優雅に、だ。遠坂家の家訓を思いだせ。

「いいえ。機嫌が悪いなんてそんなこと。わたしはいつも通りですよ。笠原君の思い違いではないですか？」

そんな猫を被せた言葉を聞いた輝一はしっかりとわたしの気持ちを汲み取ったらしい。盛大に顔をひきつらせながら少しだけ後退さった。

こういう時は便利ね、なんて思いながら僅かに溜飲を下げる。

「それにしても、教科書を忘れたのならわたしに言ってくれればいいのに。お隣同士なんですから、お貸ししてあげましたよ」

「……………嘘つけ、金取るくせに」

にこやかに笑うわたしの顔から視線をそらしてぼそりと輝一は呟く。

「当然。あんたは甘やかしたら甘やかした分だけダメになるんだから厳しくするぐらいが丁度いいのよ」

「手厳しいツスね、おい」

誰にも聞かれないように声を絞ってそう返すわたしを見て輝一は楽しそうに肩をすくめた。

——やっぱり変だ。

その仕草を見て。

その雰囲気を感じて。

そして何よりも、その笑顔に触れて。

わたしは確かにソレを認識する。

気温三十九度、今年の最高気温を叩き出した中学二年の夏休み最後の日。

あの夏を境にわたしは輝一に対して釈然としない何かが胸のなかで重石の様にゴロリと存在していた。

その異物感とも言うべき奇妙な感覚は言葉では表しづらい。それでも、強いて言うなら普段は阿吽の呼吸でお互いの事が解るのだけど、今みたいにふとした拍子に輝一の思いが解らなくなるときがある。ソレは一つ一つは羽のように軽く、触れたことすらなかなか気付かないモノだが、何度となく繰り返し体感することによって澱のように積もっていき、気付いた時にはもう無視出来ない程に大きくなっていた。

そしてその重石を見る度にわたしは、何時も焦燥感にかられてしまう。

——ハヤク、しないと

知覚できない何かがわたしの心をジリジリと焦がす。

——ハヤク、急がないと

……バカバカしい、軽く深呼吸をしてそんな考えを捨て去る。魔術師である自分がどうして他人である輝一の為に頭を悩ませなければならぬのだ。こんなモノ、心の贅肉でしかない。

——ハヤク、ハヤク、ハヤク

その得体の知れないざわめきは始まりのチャイムが教室に響き渡るのとあいまって絶妙にわたしの心をささくれ立たせた。

……もうたくさんだ。考えるのはお腹いっぱい。何よりこんな後ろ向きなことで解決するわけがないじゃない。こうなったら直接アイツに確かめてやる。

苛立ちが募り僅かに眉を釣り上げてそう決意をしたわたしは、のんびりした様子で隣の席に着く諸悪の根源に対して取りあえず小さな復讐をする事にした。

「ところで笠原君」

「何だよ？」

「次は生物の授業ですけど、数学の教科書でどうやって勉強するんですか？」

にこやかに言うわたしと輝一がああーッ！！ と叫んで頭を抱え込んだのは丁度生物の教師がやって来たのとほぼ同時だった。

とはいえ、あれだけ息巻いて決意をしたのはいいが、わたしは生徒会の雑務をこなさなければならなかったし、輝一の馬鹿は普段、休み時間はあっちへフラフラこっちへフラフラと、色んな所をさまよいつづけているからなかなか捕まらない。結局諸々の用事が一段落した頃にはもう放課後だった。

夕日が差し込む閑散とした教室を出る。基本、部活動には参加していない輝一はもうとくに家路に着いてる頃だろうが、なんだろう。なんだか今日は違う気がする。

そんなフツと浮上して来る感性を頼りにわたしは屋上へと向かうために歩を進めた。

薄暗い階段を何かに導かれるようにして一歩、一歩、上がっていく。

たぶん、いる。確実に。そんな根拠の無い確信じみた思いが錆びた鉄扉に近づけば近づく程段々と強くなっていく。

わたしはそつとドアノブを握り締める。少し日にあっていたのだろ
うか仄かに暖かい。

僅かにノブを捻り、ゆっくり開けるとそこには――

光が溢れていた。

もし感触があつたとすればフワリと絹のように柔らかな感触であろう
淡い橙の光は暗闇を余す所なく打ち消すとても優しい輝きだった。
もちろん、それだけでも十分壮観な光景だったけど。

「よう、凜。きっと、来ると思ってた」

そう言って柔らかく微笑んだ輝一が中心に立ったことでよりいっそう
神秘的に思えた。

穏やかで暖かい光の中に佇むアイツはまるで昔に読んだ絵本に出て
くる勇者様のようで。

我を忘れて茫然としてしまうほど綺麗だった。

「凜、ホレ」

そんなわたしの状態をよそに輝一は何時もと変わらない調子で足元

にあった小さなペットボトルと缶コーヒーを取り上げ、ペットボトルの方をわたしに投げてよこした。

「うわ……っと」

なんとか意識を再起動させて緩やかな放物線を描いて飛んできたペットボトルを受け取って見てみると、わたしがいつも愛飲しているミルクティーだった。

「あ……ありがとう」

「どういたしまして」

……なんか出だしのインパクトのせいでそこはかたなく調子が狂う。何をそんなにソワソワしてるんだわたしは。

「よく、屋上^{ようじょう}に来るって分かったわね」

何時ものペースに戻るためにペットボトルのキャップを開けて一口ミルクティーを含む。うん、何時も通りだ。おいしい。

「まあ、なんとなく？」

輝一も缶コーヒーのプルタブを勢いよく開ける。カッン、と小気味よい音がした。

「なんとなくでわたしの分まで買ったの？ 来なかったら相当カッコわるいわよ。あんた」

「うっせ。いらねーなら返せコノヤロウ」

ぶーたれた顔でこちらを見る輝一にいえいえ、せっかく頂いたものですものありがたく飲ませて頂きますわ、なんて気取って返したら、両方からどちらももなくクツクツと声を挙げて笑い合った。

「……で、お前はなんで来たんだよ？」

ひとしきり笑った後、缶コーヒーを傾けながら輝一は屋上の落下防止の為のフェンスに寄りかかる。

「まあ、わたしもなんとなく、かな」

「なんとなく、ですか」

「そ。ここに来たらあんたに会えるって思ったから来たの」

「そうなのか」

「そうなんです」

「……………」

「……………」

それっきり会話は無くなった。そよ風が二人の間を踊るように駆け抜ける。静かな時間、聞こえてくるは下のグラウンドから部活動に励む生徒の微かな声。けど、この沈黙は息苦しいものではなくて親しい間柄に流れるホッとするような、ゆったりとした静寂だった。

でも、わたしはそんな居心地のいい空間を敢えて破ろうとしていた。どうしてもコイツに聞きたいことがあったから。そして何よりも、自分の感じる違和感を知るために。

「ねえ、輝一」

「ん?」

「あんた、最近なんかあった？」

「……………」

ゆっくりとしたわたしの質問に対して輝一はしばらくの間、難しい顔をした後、もたれていたフェンスから体を反転させて町を見下ろした。

「なあ、凜」

「なに？」

「俺さ、凜に会えてホントに良かった」

「いきなり、何言ってるのよ」

「一緒に遊んで、一緒にメシ食って、そんで一緒に成長して……………。すっげー楽しかったし、色んな所で助けてもらってた。きっと、お前がいなかったら今の俺はいなかったと思う」

だから、ありがとう。

そう言った輝一の背中はとても大きかった。

ああ、そうか。そうだったのか。

その背中を見てわたしは理解した。

成長、したんだなって。

あの日に何があったのかは知らない。だけど、少し前まで何の変哲もない小さな輝一の背中には確実に大きくなっていた。

わたしと輝一はいつまでも一緒にはいられない。それは世界の裏側にある魔術師ある以上痛いくらいに承知している。きっとそう遠くない未来で、別離の日は必ずやってくる。だってそれがわたし（魔術師）と輝一（一般人）の違いなんだから。

魔術師^{わたし}は過去へと疾走していき、

一般人（輝一）は未来へと歩いていく。

今までは奇跡に奇跡を重ねたぐらいの偶然でそれぞれの道が重なっていただけ。

これからは曲がった道が真っ直ぐに戻っていくように少しずつ離れていく。

そしてその第一歩目が今ここで起こったのだった。

——それを目の前で見せられたわたしはイヤだ、って思ってしまった。もう少し後でもいいでしょうって。

まるで閉園時間が迫ってる遊園地でまだ遊びたいとダダをこねる子供のよう。

もう少し、もう少しだけ、と。

そろそろとわたしの一步先へと進んでいる少年へと近づいていく。
ゆつくりと、一步、一步、踏みしめて。そしてその広くて大きな背
中に背中を合わせるようにもたれかかった。

「ん？ どうした？」

脳天気なアイツの声。本当、こっちの気持ちも知らないで。でもそ
んな気持ちはおくびにも出さない。だってわたしは遠坂家当主、遠
坂凜だから。そんな情けないこと出来るわけ無いじゃない。

「別に何でもないわ。……………どう致しまして」

誤魔化すように何時も通りの調子で声に答え空を見上げる。

夕日が沈みかけ、瑠璃色の空が広がる中、流れ星を見た気がした。

響かぬ声

(いかないで、その一言がこぼれそうになった)

あたしとアイツの周波数（後書き）

はい、と言う訳で今回は番外編、勇者様が帰ってきてすぐのころの二人の様子をお送りしました。

まあ、前々から色んなサイトで見てきたお題物を書いてみたくて書いたのですが言いたいことがまず一つ。

……っーか誰だコレ？　こんなの遠坂凜じゃねえ。なんかもう、別キャラになってんじゃないかよ！

遠坂ファンに叩かれると言うか最早、全裸になって鞭でシバいて下さいい状態だよ！　全身ミミズばれだよ！！　それに輝一！　てめーカッコ付けすぎ！！　お前もうちょつと馬鹿だったはずだろーが！　！　それに加えて短編を書きたかったのに本編と変わらん文量書いてるじゃねえかあああああああ！！！！（怒）

………スイマセン取り乱しました。一つと言わず二つも三つも問題点がジャラジャラでてくるもんですから思わずやっちゃいました。……ホントこれ載せて大丈夫！？　ただでさえ亀よりのろい更新速度のくせにこんなことやって本編進めたほうがよくないか？

まあ、何はともあれ皆様にも楽しめて頂いたら幸いです。

次回はいよいよFate屈指の人気キャラのアイツが登場。上手く書けるか不安です。本当に。誰かわわって。

では次回、お会いしましょう。

かしこ

勇者（ヒーロー）と英霊（ヒーロー）（前書き）

その魂は剣のごとくありて

勇者（ヒーロー）と英霊（ヒーロー）

——月、ってどこでも一緒なんだな。

薄い黄金に輝く、大きな満月を見上げて輝一はぼんやりとそんなことを思った。

古式ゆかしい岩を組み合わせて出来たこの城は一見すると脆弱に見えるのだが、至る所に強化魔術や、受けた衝撃を城全体に拡散させることによって、威力を和らげる衝撃緩和システムなど魔術、科学技術の区別なしに惜しげもなく投入され、この世界で『絶対不落』の別名を欲しいままにしている鉄壁の城塞である。

友人であり此処を治めている双子の王と王女曰わく、『優雅かつ機能的に』をコンセプトにしているらしい。事実、王政を採用しているこの国の力の象徴であり、城下町でも観光スポットとして土産などにもなっているので概ねこのコンセプトは成功していると言ってもいいだろう。

ぐっ、と背伸びをして体をほぐし今度は、匠の技が隅々まで行き渡っているバルコニーの手すりに体を預けて眼下の町を見下ろす。

一軒一軒から漏れる光はキラキラと地上に散りばめた宝石のように輝いていてそれが人々と営みの証として確かに息づいている様子を

見ると月だけじゃなくこういう所も異世界と元の世界、どっちもた
いして変わらないよな、と輝一は感慨深げに深く息を吐く。

そうやってしばらく涼しげな夜風に身を委ねていると、

「おう、キーチ。オメエも来てたのか」

「…………、レノアス」

よ、と軽く右手を上げてこちらへやって来る燃える火をイメージさ
せる鮮やかな赤毛を持つこの青年は輝一と苦楽を共にしてきた旅の
仲間であり良き好敵手ライバルでもあった剣士だった。ニシシと、どこぞの
やんちゃ坊主がするような笑顔をその端正な顔立ちに浮かべ、レノ
アスは輝一の隣を陣取る。

「緊張、してるか？」

「なにが？」

「何がって…………、オメエ、いよいよ明日だぞ魔王城へのカチコミ。
ちなみにオレはワクワクしてるッッ!!」

「ま、そこそこ」

見た目通りの元気のあるレノアスとは対象的に輝一はドライな返事をする。放っておいてもオートでテンションが上がってくるヤツなんだからこの位がバランスとれて丁度いい。

それよりも明日、だ。

明日早朝。

世界中の国々が連合軍として全勢力を打倒魔王軍のために魔王が君臨する城へ進攻していく。そしてそれはまさしく世界を賭けた最終決戦であった。

思えば随分と遠くに來たなと輝一は思う。突然異世界から召還され、訳もわからぬままに聖剣を握りしめてまわりの仲間に支えられながら三年間、がむしゃらに突っ走ってきた。

腹を抱えて笑う位に楽しい事もあったし、逆に涙を流し、齒を食いしぼるような苦しみも確かに存在していた。だがそれも思い返すと、そのどれもが大切な事を教えてくれたように思う。しかし、今ではただ懐かしさとほんの少しだけ寂寥感だけが心に残っているだけとなった。

「なあキーチ」

「何だよ？」

ぼうっと昔の記憶を辿っていた輝一は何時になく真面目そうな声で話すレノアスに現実へと引っ張り出される。

「オレは……、いや、オレ達はオメエに謝んなきゃならねえって、ずっと思ってたんだ」

「――」

なにを、と聞き返そうとしたがレノアスの真剣な目を見てその言葉を呑み込む。

「オレには学がねえ。親父^{オヤジ}に教えて貰った剣を振り回すのがせいぜいだ。でもオレはそれで満足してるし、別に世界平和のためとかそんなのどーだっていい。今までオメエに着いてきたのもオメエに惹かれたのもあつけど何よりも楽しそうだったからな」

そう言ってレノアスは 目を細めて肩を揺らした。

「でもよ、オメエは違う。魔王なんかいてねえ、争いもねえ平和なところで学生やってたヤツをこっちの一方的な都合で剣握らせて戦場に放り出すなんてどうかしてやる。大体、ここはオレたち^{異世界}の世界

だろ。だったらたえ世界の危機だろーが関係ねえヤツに全部押し付けちゃいけねえんだ」

レノアスが輝一に出会った時からずっと感じていた思い。ソレは旅の先々で傷つきそれでも立ち上がって戦う輝一の姿を見る度に強くなっている疑問だった。でも、レノアスは輝一に旅を辞めさせようとはしなかった。決して言の葉に思いを乗せるような真似はせず、沈黙を友する事を選んだのだ。それしか、選択肢など有りはしなかった。だってどうして言えよう？ 絶望し挫折を味わいそれでもなお笑顔を絶やさず、力強く走り続ける輝一を見て辞めろなどと。だからこそレノアスは全てが決まる戦いの前夜に謝っておきたかった。すまなかった、と不器用な剣士は頭を下げる。これで許されるとは微塵も思っていない。だが、権力も金も相手^{すべ}を説き伏せる術もなにも持たない彼には愚直に謝り続けるしか思いつかなかったのだ。

「…………別に謝る必要なんかねーよ」

レノアスの顔を上げさせながら輝一は苦笑する。

「確かに何度も死にそうになったし、どうして俺が、とかも思った。人を初めて斬った時なんか三日間眠れ無かったしな」

でも、自分で選び取った道だから。

だから、後悔はしてない、とそう言い切った輝一の言葉は彼の持つ聖剣のように尊かった。

「間違ってるのかもしれない。曲がりくねって遠回りしたかもしれない。とても正道だったとは言えやしない。けど、俺は俺の歩いてきた道を胸を張って誇ることができる」

悲しみがあった。何度も死の縁をさ迷った。葛藤もあった。

だけど同時に喜びや楽しみだってあったのだ。

人を助けた時は心から喜んだ。救った町での祭りは楽しかったし、救った人に感謝されるのも悪くはなかった。

それは全てここに呼ばれたからこそ得たモノ。地球むこうでは決して手に入らない経験だった。きっと、異世界に呼ばれずにいなかったら、今の輝一より数段劣った男になっていただろう。

「だから、謝る必要なんざどこにもねえんだよ」

「そうか……、ありがとう」

「何言っただよ、気味ワリイ」

「オメエ……気味が悪いとは何だよ！ 人がせつかく礼言ってるの

によー!!」

「だからそれがキモいだって」

んだとオ!! と、青筋を立てたレノアスを見て輝一はケラケラ笑いながら走り出す。極めてくだらないハイレベルな鬼ごっこが始まった瞬間だった。

——明日、終わりが始まる。全ての因縁にケリを着けようか。

※

……また懐かしい夢を見たな。

ゆっくりと敷き布団から体を起こしてボリボリと頭を搔く。

俺が勝ち取った部屋は母屋の和室で襖を隔てた隣は士郎の部屋となっていた。

勝ち取った、と言ったが言い方は間違っていないと思う。

なんでそんな言い方になったか、それはセイバーが部屋割りの時に士郎の部屋の隣がいいと言ったことに端を発したものだった。

その理由は決して恋する乙女的なものではなく、士郎に何かあった時に素早く対応できるように、とそれはもう騎士の鏡みたいな真面目なサーヴァント的なものであったのだが、残念ながら思春期爆走中の士郎君にとってはとても許容出来るものでは無かったらしい。

まあ、それはそうだろう。いくらセイバー本人が『女である前に騎士』宣言したところで見た目は美少女には変わらないのだ。我が家の母親が持つ武勇伝並みに説得力が無い。

かくして士郎とそんな美味しいイベント味わうなんざ千年早いわ、
リア充野郎ッ!! と息を巻きまくっている俺の二人で日本人の魂
D O G E Z A を敢行、男のプライドと引き換えに現在の部屋を獲得
したのだった。

月明かりの下、若干の肌寒さを感じ身を震わせる。

聖盃戦争なんてものに巻き込まれたせいだろうか？ 妙にここ最近、
頻繁に昔の夢を見るようになった。

「……………三年経った今でもしつかりと思い出せてるを喜べばいい
やら呆れればいいのやら」

小さく笑ってゆっくりと肺の中の空気を入れ換える。複雑な気持ち
にはなったが目だけはスッキリと覚めてしまった。

とりあえず水でもものんで布団に潜りいていてそれがもうと思ったが、
隣の部屋に士郎がいない事に気付く。

「―――」？

どこに行ったのだから？ 一応アイツの守護をセイバーに約束した
手前、そのまま夢の中へとは出来そうにない。

とはいえ、衛宮家には悪意ある侵入者には警報が鳴る結界が張ってあるらしいのであんまり心配はしていないのだが。

ペタペタと冬の外気に晒された冷たい階段を下りる。ちくせう、足の裏が冷たくてたまらん。あのヤロウ、見つけたらどうしてくれようか？ そんなことをブツブツ呟きながら一階を見て回るが静寂が音になって聴こえるような静かさで人っ子一人いない。となると後は士郎が工房としてある土倉ぐらいしか探してない所はない。別館は別にいい。何かあったら我らが幼なじみ様が吊し上げてくれるだろうし。

玄関のドアを開けて、小さな石が足の裏を押しているを感じながら土倉へと足を向ける。だんだんとはつきりと目に映ってくる古い錆びた扉が半開きになっている所をみるとどうやら当たりだったらしい。

大方魔術の練習でもしてるんだろう。邪魔しちゃ悪いか、と踵を返そうとした時、

「……………そーいやアンタとはまだ面と向かって話したことはないな」

出てこいよ、と目の前の虚空を見つめて呟く。

「…………やれやれ、見破られることはないと思っていたんだがね」

すうっと、空間から滲み出すように赤い外套を纏った弓兵が現れた。背は高く背筋は真っ直ぐでブレはなく、それなりに武術のたしなみがあるヤツだった。直ぐにわかる見事な重心の取り方。鋼色の髪に浅黒い肌は一見するだけでは人種は特定はできそうにない。鋭い鷹の目を彷彿とさせる眼光今は皮肉げな笑みで鳴りをひそめていた。

「初めまして、て言やあいのか？ ま、どうでもいいや。あの時はよくも巻き込んでくれやがったなコノヤロウ」

「それはどうもご丁寧に。なに、あの程度、君の実力ならば容易いことだろう？」

クツクツと笑いながら凜のサーヴァントであるアーチャーがこともなげに返す様を見て少しげんなりする。この様子じゃ凜はいいようにいじり倒されてんな、これは。

「しかし君には驚かされたものだ、輝一。よもや人の身でサーヴァント…………それも現時点では最強であろうバーサーカーを相手取るなど…………いやはや世界は広いものだ」

「俺だけじゃアレの撃退は無理だったろうよ。多分、セイバーがいてくれなきゃ今頃挽き肉になってたさ」

圧倒的なスピードとパワー。そして何よりも厄介なのはほとんどの攻撃を無効化するあの鋼の肉体だ。こっちの攻撃は効かず、一方的に技もへったくれもないデタラメな暴力を振り回してくる狂戦士はさながら自然災害だ。とてもじゃないが現役から退き世界のバックアップも受けられない今の俺一人では止めるのはほとんど不可能だった。ホント、生きててよかった。

「しっかしまあ、いきなりの初っぱなからあんな歩く死亡フラグに遭遇するなんざ、絶対にあのメンバーの中に神様に嫌われてるヤツいるよな」

「ああ。その点に関しては心配の必要はない。十中八九、今土蔵の中にいる小僧が蛇喝のごとく嫌われている」

しれっとした感じで即答するアーチャーに理由を聞いてみると、心底愉快そうに笑みを浮かべて、ランサーに口封じの為に心臓を串刺しされて凜に蘇生された話を語った。

……土郎のヤツ、フラグとなりやあ恋愛だろうが死亡だろうが見境なしだよ

なんだか無駄に意味のわからない畏怖を感じたのだがあんまり人の事を言えないことに気が付いた。なんたって異世界で魔王打倒フラ

グである。もうギャグじゃん。笑うしかねーじゃん。そう思っ
てワ、ハ、ハ、ハと、笑ってみたがパッサパサに乾いた笑いしか出な
かった。世の中無情である。

「どうした、輝一。だいぶくたびれた笑いがもれているのだが」

「いや、ただ単にこの世界って不運なヤツにとことん厳しいよな、
つてのを再認識したただけだよ」

「ふむ、なかなか的を射た言葉だな、それは」

「やっぱり、そう思う？」

苦虫を噛み潰した顔でアーチャーは重々しく頷く。

笠原 輝一、サーヴァント アーチャー

幸運^{luck} DとE。

妙な連帯感が生まれた瞬間だった。

「……輝一。君は『正義の味方』についてどう思う？」

お互いの不幸自慢での盛り上がりが一段落したところで不意にアー
チャーがそんな事を聞いてきた。

「なんだよ、藪から棒に」

「いやなに、あそこであくせくお粗末な魔術の修行に励んでいる小僧の弦きを耳にしてね、どうやらヤツの将来の夢だそうだ。聞いた時は心底呆れたのだが後から考えてみると身近にその道の先達がいたのね。いい機会だからご教授に預かろうと思ったわけだ」

それでどう思う？ 正義勇者の味方笠原 輝一殿？ と皮肉げな笑みを作り、赤い弓兵はこちらを見やる。

「どう思うって言われてもあんまりピンとはこないな。男だったら誰しも一回は持つ夢だろうし。それに俺は別段、勇者やっててもそんな意識、持ったことは無かった」

というか、そんな余裕は無かった。目にするものは全て真新しく、自分の世界との違いに驚いてばかり。最初の頃はまわりよりも、まず自分の事の方で手一杯だった。それは標識もない暗い夜道で唯一人で放り出された感じによく似ている。そこで途方にくれていた俺を彼女や旅の仲間達が背を押し、手を引いてくれていつの間にか勇者と呼ばれるようになっていた。

「それに実際の所、向こうには明確で分かりやすい目標があったしな。今の士郎と昔の俺とは状況が違う」

「……魔王の討伐、か」

そう、ソレとアーチャーに呟きに答える。

人間を含め全ての生物は自分の生存本能に加え、自身の種の保存というのが遺伝子レベルで刷り込まれている。今人類が繁栄の絶頂期に存在しているのもひとえにこの本能が働いているから。所詮マタイの福音書で言う『産めよ、増やせよ、地に満ちよ』というヤツだ。

だからこそ人を滅ぼすという明確な脅威である魔王はその明確性ゆえ、全ての人間が力を合わせる旗印として強力な性能を発揮する。

しかしこちらは違う。地域によっては局地的な紛争が起こってはいるが世界規模で見ればそれはごく少数でしかない。現に日本という国は平和そのもので武器を所持することすら禁止されている。

つまり、なにが言いたいのかというと、

「向こうではとりあえず、魔王を倒せばそれでよかった。だけど――」

「――こちらではそれが無い。明確なゴールが存在しない以上何をもって『正義の味方』とするのか、もし仮に基準を設定するとしたら、どんな手段で、どの様な人間を救うのか。救うにしてもどの程度手を差し伸べるべきなのか……不毛だな。まるで際限のない餓鬼だ」

結論から言うとなんかそういう事になる。『人を救う』のは良いことだが度が過ぎればそれは異常でしかない。薬も飲みすぎればただの毒になるのと同様に。

「もしも、基準を設定し何をもって悪だと断定出来たとしても、正義では救われない者も沢山いる。悪でしか救われないものが」

親や親戚など頼れる大人がおらず、家もない。居るのは病気で寝たきりの妹。明日の食べ物もありつけるかどうかともわからない状態では薬なんてとても買うことなんて出来ない。しかし薬を、食べ物を買わなければ妹や自分が死んでしまう。

そんな状況で暗殺者になることによって、なんとか生計を立てている青年を俺は知っている。

人殺しは確かに悪だ。でもだからと言って正義の名の下に倒してしまっても良いものなのだろうか？ 一度失敗してしまえば信用を失い、収入がなくなり、薬を買えなくなって、その妹が死んでしまうの？

「幸福になるための椅子は常に全体よりも少ない。だからいずれ、零れ落ちる人間を退ける。九を救うために一を切り捨てる。それが『正義の味方』の真実。しかし、そんなことをすればいつか心が磨耗する。全てを救う、そんなもの、只の幻想にすぎない」

アーチャーの言ったとおり『正義の味方』なんてものは漫画や小説の中でしか存在しない。世の中は勧善懲悪と言った白か黒かの二択だけで出来ているほど単純ではないのだ。

「神様じゃあるめえし、あれやこれや何でも救うことなんざ出来やしねえ。人の手のひらはそれ程デカく作られてねえ」

けど、それでも。

「『正義の味方』はなれる」

「――」

そう断言した俺の隣で小さく息を呑む音が聞こえた。

「一人でやるには限界がある。なら二人でやればいい。二人でも駄目だったら三人で。三人でも出来なければもっと大人数で。足りないなら他からもってこえることで補う。魔術師の基本だぜ？」

仮面ライダー見てみる数が多すぎて袋叩きにされる敵の方が可哀想になってくる。

「それは理想論だ。世界はそんなに都合よく作られてはいない」

「確かにそうかもしれない。でも絶対そうとは言い切れないだろう？
その『正義の味方』が歩いた道のりには助けた人が沢山いる。その中には恩を感じてその道を歩くヤツがいるかもしれない。外から見ている人がその姿に憧れてその道に合流するかもしれない。そうすれば『正義の味方』が後ろ向いたときにはズラリと長蛇の列だ。
……いきなり全てを一人で何でもかんでも抱え込もうとするから抱えるモンの重さに耐えきれずに潰されんだ。小さくてもいい、出来ない事があってもいい。やり続ければきっと 誰かが助けてくれる。だって『人を救いたい』と言う思いは決して間違っていないんだから」

池に投げ入れられた小石は微々たるものかも知れない。けどその僅かな波紋はやがて大きな波へと変わっていくと信じてる。

人はどうしようもない生き物だ。自分意外の他者を蹴落とし虐げる。だが、それだけじゃない事を俺は知っている。人は優しさだって持ち合わせているのだと。

そしてそれは俺が異世界で得た確かな答えの一つだった。

「なるほど、それが君の答えか、輝一。なんとも君らしい答えだな」

「………恥ずかしいから凜には絶対言うなよ」

「了解した。せいぜい、口を滑らせないように気を付けよう」

誤魔化すようにボリボリと頭を掻く俺を見てアーチャーは己がマスターによく似ている笑みを浮かべるとゆったりとこちらに背を向けたようにした時、

「なあ。アンタは『正義の味方』に成りたいと思ったことってあったのか？」

思わず、そんな疑問が口から飛び出していた。

「――――」

赤い弓兵の背中しばらく沈黙を保った後。

「さてな。もう忘れてしまったよ」

限りなく無色透明な声音で答えると消しゴムで消し去ったように消えてしまった。

「――」

スッと静かに夜空をぼんやりと見上げる。

そこには異世界と変わらず黄金の月が輝いていた。

朝、衛宮邸にて（前書き）

お約束

朝、衛宮邸にて

白い陽射しを感じた。

緩やかな暖かさがまとわりつくようにへばりつき、胡乱げに目を覚
す。

「――さむ」

部屋の中は寒くてしばらくは布団の中でも籠城したかったが学校が
あることを思い出して気合いで身を起こした。

冬でもそれなりに暖かいはずの深山町だが、こっち側は事情が違う
らしい。

夜の寒さとはまた違う朝の静謐な様子を肌を感じながら口から白い
吐息を吐き出しそそくさと洗面所へ。お湯で顔を洗って外気との温
度差でサッパリとしつつ今日も良い日であるように普段信じもしな
い神に都合よく祈る。うん、こういういい加減な拝み方するのって
日本人特有だよな、ととりとめのない考えを思い浮かべていたら居
間へと到着した。

「ああ、おはよう。笠原。よく眠れたか？」

「おはようございます。笠原先輩」

「おはようございます。キーチ」

そこには相変わらずビシツとした正座姿のセイバーと朝ご飯の支度をしているだろう、エプロンをかけて仲むつまじく二人でキッチンに立つ士郎と桜ちゃんがいた。

「…………おはよう二人とも。ただし士郎、テメーは爆発しろ」

「おまえなあ…………、何でいつも一番最初に顔会わせた第一声がそれなんだよ?」

呆れ顔でこちらを振り返る士郎。しっかり手が動いているのを見ると相当の場数を踏んでいるのは見て取れる。

「だまらっしやい、リア充は黙って働け。ところで凜のヤツどうした? 姿が見えねえけど」

「リンはまだ見ていません。まだ寝ているのではないのでしょうか?」

ズズッと、大変うまそうに湯のみを傾けるセイバーの声を聞いて、

「……ああ、やっぱりな」

相変わらずな幼なじみに思わず苦笑する。

「遠坂先輩、朝弱いんですか？」

「ありゃあ、弱いってレベルじゃねえぞ。生まれたてゾンビだってもうちょっとしっかりしてるだろうよ」

学校での優等生像から想像できない数少ない凜の弱点に、三人とも目を丸くしていた。

「まあ、学校での姿しか見てなかったら驚くのも無理ねえな。けどな、俺の家に泊まった時は大概俺が叩き起こしてたんだぞ」

普通は逆である。男の方が起こされる側で女の子が起こす側のはずだ。登校時間ギリギリになっても寝くさってやがる男を幼なじみの女の子が呆れながらも揺り起こす、これは古来よりギャルゲ、エロゲで伝統的に行われる由緒正しき行事イベントなのである。儀式と言い替え

てもいい。それをあのアホは何一つわかっていらっしやらない。仮にもエロゲのヒロインだろうが、職務怠慢もいい加減にしろ。

「しゃーねえ。俺が起こしてくる」

「おい、いいのかよ。勝手に遠坂の部屋に入っても」

「ああ、安心しろ。アイツには絶叫とともに気持ちのいい朝を迎えてもらう」

「少しも安心出来ないぞ!?!」

そんなやり取りをした後、凜が根城にしている別館の客間へやって来た。

そつと音を立てずに扉を開ける。これから惰眠を貪る不届き者に天誅を下すのだ。想像すると喉の奥から笑いが込み上げ、唇の端がつり上がる。

「…………ウケケケ!」

知っている悪魔の笑いが自分から漏れでる。ちよつとだけ冷静になった。

「——う、ううん。もう……少しだけま……って」

ベッドで眠っている凜は無防備でぶちぎりに可愛い。その威力は何度も見慣れているはずの俺が一瞬惚けてしまう程。

ホント、一生眠っててくれねーかな。お願いします。

そろそろと摺り足で目標へ接近する。気分は完全段ボールで身を隠す傭兵だ。

あと、少し……………

「輝一ッ!!」

突然の叫びに全身の筋肉が収縮した。呼吸も完全に止まる。

「アンタ、焼きそばパン買ってきなさいよ……………」

凜はそう言ったきり、パタリと黙り込んで深い寝息をたてる。

「って、寝言か……………」

とゆうか、夢の中でもパシられてんのかよ、俺。

一体コイツにとって俺はどういうポジションにいるのか小一時間程問い質したい欲求を押さえつけ、目標へと到達する。

「うぐぐ………」

クソ、近くで見ると余計に威力が増してきやがる。

耐えろ、輝一。ここで負けたら全てが終わってしまうぞ!!

「そうだ、俺は負けられない！ 負けるわけにはいかないんだ!!」

寝ている幼なじみの横で寸劇を始める男。完全に変態の所業である。

「……さてと、起こすのでしょうか」

さあ、楽しい楽しいお時間の始まりだ。

ニンマリ、と笑い声を押し殺し、鼻フックデストロイヤーを執行するためゆっくりと体をかがめようとして――

「う………、ううん」

「うわっ、ちょっ――」

ドスン、と強かに腰を打った俺の目の前にあったのは見慣れた幼なじみの顔のドアップだった。

「――」

近い。後ちよつと誰かがコイツの背中を押そうものならその小さなみずみずしい唇にランデブーしちまいそうな至近距離。まさに目と鼻の先である。

それだけだったら別にいい。多少ドキドキはするがそこまで大慌てすることはない。美人とて三日で飽きるのだ、もうこの顔には慣れてる。

問題は別にある。というか大問題だ。今の体制は俺が仰向けに倒れて、その上に凜がうつ伏せで倒れかかっている状態。多分寝返り打った先にベッドがなくて落っこちようとしたところを起こそうと身を屈めていた俺が巻き込まれたといったところだろう。

まあ、正直ここまででは事故として処理できる。もう、オマエ何してんだよおー、アハハハハで済む話だ。

だが、

とっさに支えるために凜の慎ましやかな胸をわしづかみにするのはどう考えても死亡フラグなんですけどその辺どーおもいますか、神様。

大きさはちよつと掌よりも小さめでとても掴み易い。愛らしいネコパジャマ越しに感じる感触はとても柔らかかった。しかも、寝苦しかったのか第三ボタンで開けていたので左手に関しては完全に中に滑り込んでしまっていて、十代女子の若々しい肌をこれでもかとかとアピールしてやがっております、ハイ。

——人ってのは驚き過ぎるとかえって冷静になるらしい。なんかもう、二、三回心の中を驚愕が駆け巡っていたら処理が追いつかなくなつたのか極めてフラットな気持ちになつてしまった。

……っーか、神様。確かに今日もなんか良いことありますようにとは願ったがこんな後先考えない幸せはいらねーんですよ。それと

も、あれか、いい加減に祈ってやがったから流れ作業的にテキストに幸せ与えときゃ満足するだろ、とかそんな考えですか？　ぶつとばすぞコノヤロー。

今週の神様のありがたい御言葉。

知らねーよそんなん。

「……………イカン、思考が逸れた。そんなことよりもなんとかこの危機的状況を脱しなくては」

考えろ輝一。言い訳と嘘はお前の専売特許だろう。凜が寝ぼけている間になんとしてもいいくるめるのだ。確かに藤村先生の時は上手くいかなかったのかもしれないがあんなのは偶々。あの時はまだまだ心に余裕があったのだ、そんなに真剣に取り組んではいなかった。だがしかし、今回は違う。言い訳を考えなければ地獄の門へホール

インワン。その場で物理的に抹殺されるに加え、魔術師の怪しげな術によって来世どころか未来永劫呪われ続けるかもしれん。ホント、マジ頑張れ俺の脳みそ。

ギュッと瞼を閉じる事によって視覚情報を遮断し、この世に産まれいづった時からいまままで最高の思考速度へと頭の回転を急激に早めていく。

お前なら出来る、出来るッ！！ ガンバレ頑張れ頑張れ！！ やれる気持ちの問題だッ！！ 出来るッ！ やれば絶対出来るだからああああ！！

どこからともなく聞こえる声援に背中を押され遂に完璧なる言い訳がここに完成した。

よし、いける。完璧にごまかしきれる！ 心配は無用。さあ、ゆっくりと目を開けるんだ輝一――

「……………」

「」

目を開けたら完全にお目覚めになられている姫がおられました。

いつの間にか歓声はかき消え、痛い沈黙が身を削る。

オワタ。

そんなテロップが大変腹立つ絵文字とともに頭の中をゆっくりとよぎっていく。

どうする！？ もう諦めて謝り倒すか？ 悪気はなかったって土下座するのか？ つーか赦してくれんのかコレ！？

身体が北極に放り込まれたかのように震える。その震えた手に連動して凜の小さな胸も震える。死にたくなってきた。

……いや、まだだ。俺の希望は言い訳まだ残っている。

目に炎を宿し、震える身体を必死で押さえ込む。痛いのは嫌だろ、まだ死にたくはないだろう輝一。だったらやるしかないんだ、今この瞬間で世界をも騙しきれ——！！

そうだ、足掻け、笠原輝一 イイイイツツ！！！！！

そうして俺は手に力を込めてゆつくりと希望^{言い訳}を口にした。

「やあ！！ ボクはオツパイの精霊、キーチ！ 君の胸を大きくするのためにやってきたんだ！！」
（輝一裏声）

そう言い終わった瞬間、ガツチリと顔面を手で覆われて目の前が真っ暗に――

＊

「笠原のヤツ……ホントに大丈夫なんだろうな？」

コツコツと手際よく、食材を切りながら少し前に子悪党のような胡散臭い笑みを顔に張り付けて出ていった友人を思い浮かべる。例えば

相手があのあかいあくまだとしても、仮にも女の子の部屋なのだ。男が無遠慮に入るもんじゃない。ここは同性のセイバーに頼んだほうがよかったかもしれない。それに何より最後の言葉が不吉すぎる。

「大丈夫ですよ、先輩。笠原先輩は優しいですから、最後のは冗談ですよ」

頼むから余計なことはしてくるなよ、と手早く魚を卸しながら別館へ向かっているだろう笠原にむけて念波を送っていると、隣で味噌汁を作っていた桜が小皿に味噌汁を入れてこちらへ差し出しながら言う。うむ、うまい。

「そうです、シロウ。キーチのあれは単なる例え話でしょう。心配にはおよばない。それよりも、いい匂いがしてきましたね」

そうやってそわそわし始めたセイバーに桜がニコニコと笑顔で小皿を差し出す。

「セイバーさんも味見、どうですか？」

「はい、頂きます」

そんな微笑ましいやり取りを聞きながらポツリ、と呟いてみた。

「でも、あの笠原だぞ？」

突如、空気に亀裂が走ったような乾いた音がした。

「大丈夫ですよ、先輩。笠原先輩は優しいですから、最後のは冗談ですよ。……きつと」

「そうです、シロウ。キーチあれは単なる例え話でしょう。心配にはおよばない……多分」

壊れたラジカセのような清々しい棒読みっぷりを発揮した二人は誤魔化すようにひきつった笑顔を見せる。

笠原輝一。

オーソドックスな日本人のカラスのような黒髪と黒い目を持ち、背は一八〇センチと長身でつり上がった目尻と合間って下手な不良より威圧感があるのだが、いかんせん頭の中が年がら年中お祭り気分みたいな男なので完全に見かけ倒しとなっていて、所詮三枚目役者といったヤツである。

それにくわえて普段からあんな性格をしているせいかあいつのまわりにはトラブルが頻発する。というか、最早自分からトラブルに飛び込んで行ってるんじゃないのかってぐらいの勢いだ。しかも本人に自覚がないから始末が悪い。ウチの学校で数々の伝説を作り上げたが、それに巻き込まれた人間は数知れず。そうして付けられた二つ名は『A級戦犯』。かく言う俺も巻き込まれたことのあるクチで後に『第一次リアルアドミラブル大戦』と呼ばれた——それはもうこれで一つの短編小説が書けるぐらいに込み入りながらも素晴らしく馬鹿馬鹿しい——事件だったのだが、高校に入ってから

付き合いでこんな感じなのである。ホント、幼なじみをしているという遠坂には頭が下がる思いとささやかな同情を禁じ得ない。いや、別に悪いヤツではないのだが。

まあ、ここまでが表の顔、今まで机を並べていた友達としての笠原なのだが、あいつにはその他にももう一つ別の名前を持っていたりする。

『勇者』笠原輝一。

ここではないどこか、すなわち『異世界』に喚ばれてそして、世界を救う為に魔王と戦った『勇者』。

簡潔に言ったらこんな感じだ。小学生、中学生を通り抜けたことのある男は必ず想像する悪くいえば使い古された、ありきたりな物語。事実、笠原本人も『店頭で山積みになってそう』と評価する程に形式的なそして見事に典型的だった。

でも、それは決して悪い意味ではない。むしろみんなが一度は想像するありきたりさはつまり、それだけ多くの人間が一度は夢に見る普遍的な理想なのである。

相応しい言い換えをするのなら、王道。

もしかしたら、現代だけに限っていえばランサーのサーヴァントであるクーフーリンや褐色の巨人、バーサーカーよりも有名なものかもしれない。——この二つを分けるのは歴史が浅いのと主人公が固定化してないという些細な違いしかないのだから。

そしてそれと同時にこれは笠原輝一の物語でもある。あいつの話はざっくりと一通り聞かせてもらったがあくまでもざっくりとだ。細大もらさず話してもらった訳でもないがそれでも、昔の冒険譚を話している時の笠原はとても誇らしげで、何よりも嬉しそうだった。まあ、その後は遠坂のやつにしこたま怒られてはいたが。

きつと遠坂は遠坂で思う所があったのだろう。そりゃそうだ、今まで普通の幼なじみだったやつをいきなり裏世界のそれも聖杯戦争なんてとびつきり物騒な殺しあいに巻き込こんだ挙げ句、サーヴァントなんていう伝説上の英雄に護るところか逆に護られてんだから驚くほかない。俺だって桜や藤ねえがそうになってたら恐らく同じ反応をする自信がある。……いや、藤ねえの場合はそんなに驚かないかもしれない。無理が通れば道理が引つ込むを地で行ってるからなあ、『へえ、そう』とかで終わりそうな気がする。なんというか、普通に道場とか作って弟子とかとってそうだ。でもなんだか、それはそれでザワザワと落ち着かなくなる、とくに心が。

それに俺としても何も思わなかったわけではない。勇者となって魔王を倒した笠原の存在は『正義の味方』という目標があってもそこに至る手段が見つけられずに燻っていた俺にとってもいい刺激になっていた。

浮かび上がるのは一つのイメージ。

——果てしなく、月が霞む程の暗い夜の中、
浮かび上がる頼もしい背中。

——握る剣はたとえ闇に包まれていようともだだひたすらに尊く、
うつくしい。

——決して退かず、まっすぐに前を見つめる眼はしっかりと敵を見据えていて。

——ゆっくりと不敵な笑みを浮かべる笠原はさながら風のように敵に駆けていき、そして、

「うぎゃああああアアアアアアアッ！！！！！！！！」

——盛大に悲鳴を上げ、敵にぶつとばされた。

ん？ アレ？ なんかおかしい。普通ここは颯爽と敵を斬り捨てる場面じゃないのか？

というか、

「ちょ、マジごめん！！ グボッ！ いや、ホントに事故だったんだってっ！！ でなけりゃそんな板にさわ痛い痛い！！
ち、違う！ この『いた』は『痛い』の『いた』であって『まな板』の『いゲエフウツッ！！』もう、本当にごめんなさい！ もう二度

としないから！ 誓う、誓います！！ だからその、腕から手を離し……ああああ！！ う、腕がプランプランに、俺の腕が……ッ！！ つか何！？ そのドイツ語と指先にあるまっくろくろすけみたいなヤツ！？ 虚閃^{セロ}か！？ 黒虚閃^{セロ・オスキュラス}なのか！？ う、嘘だろ、や、やめ——」

いやああああ！！ とこの世終わりみたいな絶叫が響いた後、ぷつぷつと静かになる。

完全無欠に悲鳴だった。

「……………」

「……………」

「……………」

一体あいつは何をやらかしたんだ。

思わず桜やセイバーと顔を見合わせるが誰も何も喋らない否、喋れない。

グツグツと鍋が煮える音だけが妙に寒々しく聞こえる。

嫌な、なんとも言えない沈黙がしばらく続いたが、縁の下の力持ち属性の桜には耐えられなかったのか、おもむろに口を開いた。

「……あ、あの！」

一体この状況下でどんな事を言うのか、俺とセイバーの視線が集まる。

その視線の集まりに耐えかねるのか、しばらく目をキョロキョロ所在なく動かした後、意を決したように小さな手を胸の前で握って、

「お、お魚、もう焼いちゃっていいですか……………つつ？」

全力で逃げた。

当然の選択である。

誰が好き好んで関わろうというのか。

それにこの国はこんな有り難い言葉が存在している。

知らぬが仏。

なんとも、いい言葉だ。思うだけでなんとも心が安らぐ。

「そうだな、じゃあ、頼めるか？」

「はい！」

「セイバーもお箸とか食器類を運ぶのを手伝ってくれ」

「承知しました。全身全霊を込めて挑みます」

テキパキと手際良く進む朝食の準備。

それを現実逃避と人は言う。

「それにしても」

少し高い所にある戸棚に背伸びをしつつセイバーは言う。うん、なんかだか可愛いぞ。見ていて微笑ましくなる。

「なんだよセイバー」

「キーチとリンはどうしたのでしょうか？ まだ寝ているのでしょうか？」

あ、笠原のアレ、なかったことにしたんだ。

さすが剣の騎士、容赦がない。

「本当ですねえ。笠原先輩と遠坂先輩もうそろそろ起きないと遅刻しちゃいます」

「まあ、大丈夫だろ。その内、飯の匂いに誘われて起きてくるさ」

「そうです、サクラ。こんなに美味しそうな朝食を逃すなんてありえません。必ず起きてくるでしょう」

誰も起こしに行く、とは言わない。あくまでも自主性に任せるのがウチのルールだ。……別ひびってるわけではない、断じて。

そんなこんなで朝食の準備も終わりに近づいた頃。

廊下の方から足音が聞こえてきた。

きた………ッッ！！

俺を含めた三人はだるまさんが転んだをしているようにその場でピタリと停止する。

桜なんかビクリしすぎてお玉を持ったままへっぴり腰で止まっていた。何もそこまでおどろなくても、と笑い飛ばせないのがつらい。

トタトタと足音が近づいてくるにつれてこめかみから嫌な汗が出る。

ええい、覚悟を極めろ衛宮士郎！！ 現実から眼をそらすな！

たとえばどんなことがあっても受け入れろ——！！

「おはよう、士郎、桜、セイバー。いい朝ね」

と意気込んだのはいいが案外普通に挨拶された。遠坂はすでに制服も、髪も整えてあってパツと見た感じ普通である眠そうな様子もない。後ろにいる笠原も特に外傷はなさそうだ。あれだけ我が家に響いた悲鳴が嘘のようである。台所の隅の方でセイバーと桜も安心したようにつめていた息を吐いたのが見えた。

が、一つ言わせて欲しい。

よく見てみると所々おかしなのが見え隠れしているのは気のせいかな。

とりあえず、言いたいのはまず笠原のTシャツ。

遠坂を起こしに行ったときは白の無地だったのにいま見るとやたら豪快な筆文字で『血祭り』と書いてあるのはなんなんだ。絶対汚れたから一回着替えただろ。何に、とは言わないが。しかも笠原のヤツ、普通に立ってるみたいに見えるけど瞳孔が開いてるぞ!?

本当に大丈夫なんだろうな!?! 死んでるんじゃないのか、コレ!?!

「あー、遠坂?」

「何かしら、衛宮君?」

何気ないいつも道理の遠坂の返答だが、……なんか、その背後に般若像が浮かび上がってるんだが、目の前錯覚かな?

「なんか……、笠原は生きてるのかっていうか、その、大丈夫なのか?」

「一体、何を言ってるの? 衛宮君。輝一ならいつもどおりよ。いままで寝ていたからついでに起こしにいったの」

ね、輝一? と微笑みながら遠坂にそう言われた^{輝一}勇者は、

「ようこそ、ゆうしゃりん!!　ここはえみやじょうだよ!」

……村人にジョブチェンジしていた。

「どこがいつもどおりなんだ!?　何があったかしらんが、どうなったらこんなことになるんだ!?」

「か……、笠原先輩、大丈夫ですか!?　だ、誰か衛生兵、衛生兵を呼んでください!!」

「お、落ち着いてください、サクラ。衛生兵は来ません。ここは私たちが何とかしなくては」

桜が笠原を正気に戻すため肩を小さく小突いていたが、当の笠原はまるで背骨がバネにでも変わってしまったかのようにびいよんびいよん横に大きく揺れるだけであった。まったくもって朝から気分の悪くなるような風景である。

「おかしいわね。ちゃんと、後片付けは治したずなんだけど」

そんな笠原を見てにボソリ、と呟く遠坂。小さく舌打ちするその様子には在りし日の学校のマドンナの姿など微塵も感じられない。ああ、昨日からうじて生き残っていた憧れががらりと完全に崩壊していく。

「ようこそ!!　ゆうしゃくら!!　ここはえみやじょうだよ!」

「わ、わたしは勇者じゃないですよ！　もう、しっかりしてください！！」

「サクラ、古来よりこの国に伝わる修理法を試してみてはどうでしょう」

「修理法……？　それってどんな……？」

「ものは試しです。やってみましょう」

信じてたものに裏切られたような気分になり少し気落ちしていた横で笠原をどうにかして元に戻そうと四苦八苦していた桜は策が閃いたらしいセイバーに視線を向けていた。

自信满满といった様子で立ち上がるセイバーは右手を手刀の形に変えて笠原に近づく。

「斜め四十五度に構えて――」

ゆるり、と右手を掲げる。その姿はまさしく、武人。持っていないはずの剣まで見えそうだ。そしてそんななんとも言えぬ迫力を発しながらセイバーは、

「――たたくッッ！！」

真っ直ぐ振り落とした。いや、振り落としたみたいだ、が正しい言い方だろう。なんたって振り落とす手がまるで見えなかった。気がついた時には、ドゴォッ！！　と人類が奏でちゃいけない音とともに

に畳に頭から突っ込んだ笠原しか見えなかったのだから。

「おい、セイバー！！ 力加減を考えろよ！」

「む、すいません。なるべく強い力を加えれば効果が上がると思っ
たんですが」

力うんぬんの前にそんなアナログな治し方が通用するのは白黒テレ
ビぐらいしかないことを理解してほしかった。

「あの、笠原先輩！？ 生きてますか！？」

床にへばりついた笠原の頭を起こし、ペチペチと頬を張る桜なのだ
が、動揺してるらしい。ビンタの往復速度が早い、だから加減をし
てやれって。

……しばらくして桜の往復ビンタが効いたのか唐突に瞼をぱっちり
開き、赤く腫れ上がった頬を動かして口を開く。

「——なあ、なんで俺、こんな所で寝てんの？ つーか頭とほっ
ぺが異常にジンジン痛むんだが……。一体全体どうなってやがる、
俺、確か凜を起こしに行ったはずじゃ……」

……色々言いたいことはあるが、とりあえず笠原が復活したことで
良しとしよう。だからセイバー、自慢げな顔をするな。今回は例外
だからな、他の人間には絶対するなよ。

隣にいる桜と顔を見合わせ、ため息を吐く。いつもは朝飯食べるのにここまでの時間は掛からないのに今日は朝っぱらからどっと疲れた。こんな続けたら先が思いやられる。

……そんな中、現状を未だに理解しきれずしきりに首を傾げる笠原にいままで沈黙を保っていたあかいあくまが動き出した。

「違うわ、輝一。あなたが起きるの遅かったからわたしが起こしに行ったのよ。大体いつも『たまには幼なじみとしての仕事をしろ』って文句言うじゃない。だから今日はあんたの言うとおりにしてあげたのに」

「えー？ そうだったかあ？　なんか柔らかい鞠みたいな感触が手に「残ってないわよ」……………え？」

ぞっと背筋が逆立つような声音で遠坂は言う。

「わたしが起こしに行ったんだからその手は何も触れてない。だから何の感触も残らない」

「いや、だって……………」

「だってものない。……………それともなに？　あんだ、わたしが嘘でもついていると思ってんの？」

……いつの間にか、本当に極めて自然な動きで土下座していた笠原の頭の上にスカートの絶対領域が見えるように見えないうに絶妙な角度で右足を乗せる遠坂の姿はさながら一体の銅像のように様になっていた。というか完全にやりなれてるな、と思わせるような見事な手際の良さだった。

「あんたは何もなかった、見なかった、触らなかった。……はい、復唱」

「俺は何もなかった、見なかった、触らなかった」

「これまでの過ちを悔い改め、わたしに『Antique』のガトーシヨコラをご馳走します。はい」

「いや、それかんけ「復唱」……これまでの過ちを悔い改め、遠坂凛様に『Antique』のガトーシヨコラをご馳走します」

『Antique』のガトーシヨコラ、価格七三〇円。

輝一の奉仕、時給〇円。

普段の二人の関係がよく分かる光景だった。

「しつろーっ！　ご・は・んー！」

がらがら、と玄関の扉を開ける音と共に元気な声が響き渡る。どうやら虎のお出まじらしい。すでに遠坂と笠原は俊敏な動きで机にちゃっかりついていた。見事な変わり身っぷりである。

大変賑やかな足音が暫く続いた後、飛び出すといった表現がぴったリハマるような勢いで居間に入ってくる藤ねえ。

「おはよう、みんな！」

元気いっぱいな挨拶にそれぞれが答える。いつもより倍近く返ってくる返事に満足げにうむ、元気があっていいことじゃ、なんておどけて頷く。いや、アレは果たして元気と言っているのかどうかははてしなく疑問だが。

「アレ、どうしたの士郎？　なんかお疲れ？」

いつの間にか、ずいっと顔を覗きこまれてた。やれやれ、　どうやら顔に出ていたみたいだ。

「ま、色々と大変でして」

「ふーん。でも、それぞれで悪くない、って思ってるでしょ？」

「……………」

何も返さなかった俺を見てムフフと得意げに笑うとさーごはん、ごはんーなどと鼻歌混じりでいつもの場所に座る藤ねえ。

やっぱりかなわないな、本当に。

藤ねえが差し出す茶碗にしゃもじで出来立ての白米を山盛りによそいながらそう笑った。

朝、衛宮邸にて（後書き）

ちくせう、なぜだ、話がまったく進まない。

信じられるか？ コレ、まだ飯も食ってねえんだぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622n/>

Fate/Day to break

2011年12月17日18時48分発行